
ゼロからの再出発

クロカラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロからの再出発

【Nコード】

N4775G

【作者名】

クロカラス

【あらすじ】

ガンダールヴこと平賀才人が死んでしまった。しかしそのあとト
ンデモナイことに・・・

第1章 散りしガンダールヴ（前書き）

誤字脱字の報告よろしくお願いします。

はじめてのファンフィクションですがどうぞ

この世界少々お付き合いくださいませ。

第1章 散りしガンダールヴ

神の左手ガンダールヴ。

勇猛果敢な神の盾。

左に握った大剣と、右につかんだ長槍で、導きし我を守りきる。

サイト・カウント・ド・ヒラガ・ド・オルニエールの人生の幕が今降ろされようとしている。

彼は、戦の最中仲間を守るため犠牲になった。

彼の傍らには妻ルイズが見守り周りを友人、子供達で囲まれていた。

彼は元平民だったにもかかわらず最終的には伯爵にまで上り詰めた。この逸話は後世にまで語り継がれることとなった。

そんな彼だったが強大なる死には勝てなかったらしいが、最後には顔に笑顔を残したまま逝去されたそうだ。

しかし、幸せな人生を送ってきた彼は笑顔が絶えることがなかったという。

彼の人生はその後のハルケギニアに永遠と語り継がれることとなった・・・

伝説のガンダールヴとして・・・
そして

ハルケギニアの英雄として・・・

第2章 蘇りしガンダールヴ

次に気がつく懐かしい部屋にいた。
日本にある才人の部屋だった。

「どづいうこと・・・だ？俺は確かに」

そう、彼は気がつく自分の部屋で寝ていた。
部屋にある本棚、机、ベッドの位置までルイズに使い魔として召喚される前のままなのだ。

それに・・・自分は若返っているではないか！
明らかに17歳だ。
どこからどう見ても高校生の姿なのだ。

「夢・・・じゃないよな？」

試しに本棚から一冊マンガを取ってみる。

発行

2003年1月1日 初版第一刷発行

間違いなく自分がハルケギニアへと召喚される前の年のものだった。
続いて自分の考えを確たるものにするためにカレンダーへと目を移す。

2004年6月5日土曜日

自分がハルケギニアへと召喚された年だった。

数十年たつても忘れることができない日だ。間違っ方がどうかしている。

この日、俺は修理に出していたパソコンを取りに行った帰りにハルケギニアに召喚されたんだよな？

これは、あれか？神の悪戯か？

何にしる今日俺は行方不明に・・・ハッ！

確か、2時頃あの鏡みたいなゲートが目の前に現れたんだよな
ということとは2時に俺の目の前に現れるということか？

それとも、あの場所に現れるということだろうか？

ん〜、と唸りつつ多分前者だろうと思った。

証拠はないが俺の中の何かがそう告げている。

そんな気がしたからだ。

「そつと決まれば準備するぞ！」

自分に気合を入れてハルケギニアへと旅立つ準備をする。

まず、旅行などにしか使わない大きな鞆を用意した・・・ときに

「こらあー！才人！いつまで寝てんの！早く起きなさい！」

と下から母の大きな声がした。

確かに時計を見ると8時35分

サイトとしては異世界旅立ちに向け準備はしたいところだが母の手料理も捨てがたい。

おとなしく下へ降りて行った。

するとそこには、休みなのか父の姿があった。

ソファーに座り新聞を広げていた。

「おはよう。才人」

久しぶりに聞いたような父の声

「おはよう。父さん」

こうした普通の親子のやり取りが今の自分にとってはとても懐かしく感じられる。

テーブルに目向けると

食卓を彩っていたのは焼き魚、味噌汁、納豆、ご飯だった。

味噌汁があったことにサイトは猛烈に感動した。

味噌汁を一口すすった瞬間全身を何かが駆け抜けた。
旨い！のも確かだがそれ以上に疑問が出てきたのだ。

実は、サイトは地球に帰れているのだ。

心配で自分を待っているであろう両親の元へ帰ってこれた。と思う。
なのに、その方法が思い出せないのだ。

おかしい。

ヴィットーリオ・セレヴァレ（聖エイジス32世）の『ワールド・トピア世界扉』で
帰ったでもなく何か別の方法で

帰ったはずなのだが肝心の帰った方法が分からない。
というか帰ったことさえ忘れていたのだ。

もう一つ分からないことがある。

4番目の使い魔のことだ。

名前はおろか姿かたちさえも分からない。

忘れているのかもわからなかったかすら分からない。

まっ、そのうち何とかなるさ、とこの疑問はひとまず忘れておくこ
とにした。

食事を終えたサイトは台所にいる母に声をかけられた。

「才人。今日アンタ、パソコン取りに行くって言ってたでしょ。早
く取りに行きなさい」

サイトは素直に返事をして出かける準備をした。

どうせ、出かける予定だったのだ。ハルケギニアに持っていくもの
を買いたくもある。

「ねえ、母さん。味噌とか米とか調味料を俺が帰ってくるまでに用
意しといてくれないか？」

「なに？あんだ急にどうしたの？」
母さんが不思議そうな顔して訊ねてきた。

「うん。ちょっと、キャンプにでも
咄嗟に口から出てきた。」

「あら、いいわね」
と言って了解してくれた。

（嘘は言っていないよな？）
それにしても、普通急にキャンプとか言って「あら、いいわね」と
は言わないだろう。
理解力があるのか
それともただ単に息子が出かけた方がいいのか

前者だと思いつつサイトは家を出た。

第3章 ガンダールヴの買い物

大きな鞆を持って町を出歩くのは結構度胸が必要だ。
街ゆく人の視線が自然と集まるからだ。

だが、今の俺は17歳
そんなことを気にしているようでは青春を謳歌できないのだ。
最初の目的地についた。

ちなみにパソコンは精密機械だし重くなるので最後に取りに行くこ
とにした。

時間は9時15分

余裕だ。

ここは、町でも一番大きいミリタリーショップに来た。

この店は、サバイバルゲームをする奴らのためにあるといっても過
言ではない。

(というかミリタリーショップってそのためにあるよな?)

というわけで時間を取りたくなかったのでそこらへんの店員をつか
んで高校生でも買えるような

ナイフを25本買った。

多少買いすぎではないか?とも思ったが17年間ため続けた虎の子
の預金通帳なるものに余裕があったので

若干のためらいはあったものの買うことができた。

それから、ミリタリーリユクなるものを2つほど買った。

あっちの世界では普通にオーク鬼トロール鬼といったやつらがいる
ので念のためである。

続いてテントをやはり2つほど購入した。

1つのテントには大人が3人は入れるほどの大きさがあるが、たまたま持ち運ぶのに苦にはならないだろうと思った。

さらにエアガンを5丁ほど購入してみた。

実物には及ばないにしても当面はあると便利だからだ。

BB弾は10セット買ったしこれでいいだろうと出口に向かおうとすると目の端に何かが映った。

鋼鉄の槍だった。

手に取ってよく見てみると3段階で伸縮できるらしく一目で気が入った。

丈夫だし短くすれば邪魔にならない伸ばせばそれなりの長さがある。サイトはウキウキしながらレジへ持っていった。

ミリタリーショップを出たサイトが次に向かったのはスーパーマーケットである。

味噌や米は母が用意してくれているだろうが缶詰やレトルト、カップめんなどは自分の好みで買っておいた方が
良いと思ったからだ。

結果、いつも以上に好きなものが買えたサイトはホクホクしながらスーパーマーケットから出てきた。

「ふう、あとは・・・」
と呟きながら大荷物を持ったサイトは大通りを歩く。

しばらくしてサイトが入った店は書店だった。
いつもは、漫画しか読まないサイトだがいつもとは違い難しそうな本が置いてある所に向かっていく。
専門書の類が置いてある所だった。

数百冊にも及ぶ本たちを慎重に吟味してカゴに入れていく。
特にガソリン関係、蒸気関係の雑誌や書物を多く買った。
最後にいつもは絶対と言っていいほど立ち寄らない参考書コーナーにも立ち寄り科学の勉強に役立ちそうなものを数冊買った。
こうして、重い荷物をひっさげて書店を出た。

「あとは、パソコンだけだよな」
声を出して確認したのち家電量販店への道に行く。

十数分後、店員のどこか演技じみた
「ありがとうございますー！」
を背中を受け止めつつ家に向かった。

あと、2時間ほどであの鏡みたいなゲートが開く
すなわち、あともう少して両親としばし別れなくてはならなくなる。

そのことが、自然とサイトの足取りを急がせた。

第4章 別れを告げるガンダールヴ

家に帰った俺は急いで準備をした。

前の召喚は、急だったので服は一着のみだったので苦労したが今度
は（なんとなく）分かっているのでバッグに服を詰めまくる。

防寒着、Tシャツ、ワイシャツ、下着類など

あとは滅多に着ることのなかったスーツを一着

これで、衣服は良いだろう。

これで、衣食住整ったって感じた。

携帯やデジタルカメラ、パソコン、それらに使う充電器類もしっか
り鞆に入れた。

もちろんマツチ、100円ライター、救急道具に薬も忘れてない。

旅行鞆が1つ

ミリタリーバッグが2つ（これにはテントやBB弾が入っている）

食料用バッグが1つ

計四つのバッグにまとめられた。

4つと言うと大きさに聞こえるかも知れないがあまり大したことは
ない。

一人で十分に持つことができるからだ。

もともと、これは彼が鍛えられたガンダールヴだったからだろう。

大人でも全部持つのが難しそうなバッグを軽々と持っていく。

「あとは、これを渡しておくだけだな」

机には二つの封筒があった。

ひとつ目の封筒は『退学届』と書かれていた。

ふたつ目の封筒には『両親へ』と書かれていた。

その二つの封筒も持ってサイトは下に降りた。

「父さん、母さん。話があるんだ」

二人は大荷物を持って現れたサイトを見てびっくりしたが息子の真剣な目を見てまた驚いた。

「ちょっと座って欲しいんだけど・・・ありがとう」

二人が椅子に座ったのを見て先ほどのひとつ目の封筒をテーブルに出した。

いきなり退学届なるものを出した息子に驚きを隠せなかったのか息をのんだ。

「っ！こ、これは」

手に持って確かめてみたりしているがいくら調べようと退学届は退学届

それは変わらない。

「そう。退学届だよ」

息子の口から直接聞かされた二人は啞然とした。

「どっ、どうしてこんなものを」
母のうわずった声がサイトの耳に届く。

「いじめとか・・・なのか？」
父の声も少し震えている。

「ううん。違うんだ。いじめとかじゃなくて・・・」
そして、サイトは話し始めた。

異世界のこと

ハルケギニアのこと

これから起こるであろう出来事

そして

大切な人が待っている・・・ということ

話を聞き終わった両親の顔には安心とも笑顔とも言える穏やかなものが広がっていた。

「でも、いつか。いつか必ず帰ってくるから。待っていて」
「何言ってるんだ。才人。お前は俺たちの息子じゃないか。いくらでも待っててやるよ」

「そうね。それに、今の話とてもウソには聞こえなかったしね」

サイトは、とても感動した。

こんなにも信頼されていて嬉しかったのだ。

「そのかわり、向こうの写真たくさん送れよ」

「うんっ!」

とびきり、元気のいい返事をした。

「さあっ！美味しいお昼ごはん作らなきゃ!」

母さんが威勢よく台所へと出て行った。

「よしっ。父さんも何か作るか!」

と行って父さんまで台所に行ってしまったのはちょっと驚いた。

その間にサイトは思いついたことがあったので庭に出てみた。
サイトの家の庭は少々の運動ができるくらいの広さはあった。

そう。サイトのやってみたかったこととは

前に覚えた技を試してみることだ。

その一つ。

完成までに7年の歳月をかけて編み出した技

『瞬動』だ。

編み出して自分が納得できるレベルに達したのが27の時だった。
足に力を入れ地面を蹴る。

シュンッ！

5 m先に、サイトの姿があった。

「体は覚えてなくとも魂は覚えてるってか？」

『瞬動』以外にできることがない・・・というかやってしまったら
周辺の家を丸ごと弁償しなければならぬ事態
になってしまったため軽い『瞬動』の練習だけをした。

「この調子ならちょっとで勘を取り戻せるな」

と満足げに浸っていると庭に両親がやってきた。

「ほら、サイトの好きなカレーだぞ」
と言ってカレーの皿をサイトに差し出した。

「なに。たまには、庭で食べるのもいいなと思ってな」
それからしばらく家族3人で昼食をとった。

1時50分

「ごめん。父さん。母さん。そろそろ時間だ」

二人は少しうつむき気味になる。

「大丈夫！心配いらない」

父さんがニヤツとして

「そうかあ？お前はぬけてるからなあ。父さん心配だあ」
それにつられて母さんが

「そうねえ。あんたぬけてるから」

「ぬっ、ぬけてるって・・・」

誰からともなく笑った。
それにつられてひたすら笑っている

あの、鏡のようなゲートが現れた。
二人には見えてないらしかった。

「じゃあ、俺行くよ！」

「そ、そうか。元気だな」

「連絡・・・頂戴ね」

「うん。分かってるって。あと、これ」

サイトは二人の手に封筒を渡しゲートに入ってしまった。

サイトが渡した手紙にはこう書かれていた。

両親へ

いきなり、異世界行くとか言っちゃってごめん。
でも、大丈夫。

元気にしてると思うから。
2人も元気だね。

あと、今日まで育ててくれてありがとう。
感謝します。

これからも迷惑かけると思っけどよろしく。

才人

第5章 ゼロのガンダールヴ（前書き）

誤字脱字の訂正よろしくお願ひします。

第5章 ゼロのガンダールヴ

暗い、暗いゲートをくぐり終わった先は抜けるような青空が広がっていた。

サイトはどっちら寝転がっているらしかった。

「あんだ誰？」

サイトと同じ年くらいの女の子がサイトの顔をまじまじと見つめていた。

黒いマント

白いブラウス

グレーのプリーツスカート

極めつけは桃色がかったブロンドの髪

間違いなくルイズだった。

サイトは周りを見回してみる。

ルイズと同じような格好をした人たちが自分を見ている。

間違いなくここはトリステイン魔法学院だと確信をもった。忘れるはずもない校舎がサイトの目に映った。言いようもない感動がサイトの体を駆け抜けた。

「あんたは誰って聞いてるでしょっ！」

先ほどの質問に答えなかったのが不満なのか語尾を強めて言われた。

サイトは立ち上がって答える。

「俺は、才人。平賀才人」

「どこの平民？」

間髪入れずに質問された。

平民・・・そうか。

俺はこのときはまだ平民だったな。とサイトは少し切なく思った。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

人垣がどっと笑いだした。

「ちょ、ちよつと間違えただけよ！」

人垣の笑いが増した。

「いつだって間違いじゃないか！」

「さすがはゼロのルイズ！笑わせてくれるぜ！」

もう人垣は爆笑ものだ。

「ミスタ・コルベール！」

ルイズが人垣に向かって声を張り上げた。

すると、大きな木の杖を持ち真っ黒なローブを着こんだ中年男性が現れた。

コルベール先生だった。

前の世界では、だいぶ前にお亡くなりになったかつての恩人がいきなり現れたのだからもう涙ものである。

様々な感動とあいまってサイトは少し目がうるんでしまった。

誰にも見られたくないのうつつむいて袖口で涙をそっと拭いた。

そのコルベール先生が再召喚のお願いに必死になっているルイズを優しく諭した。

「決まりだよ。ミス・ヴァリエール。確かに彼は平民かも知れないが召喚された以上は君の使い魔だ。

君は彼を使い魔にするしかない」

尚もルイズは必死に食い下がるがやがては諦めたようにがっくりと肩を落とした。

そんなルイズを見てコルベール先生は儀式を続けるように促した。

そしてルイズはなにか決心したようにサイトの前にきた。

「感謝しなさいよね！貴族にこんなことされるなんて普通は一生ないんだから」

と言いながら目をつむった。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

サイトの額に杖が置かれる。
そして……

「ん……」

ルイズの唇がサイトのそれと重なった。

『コントラクト・サーヴァント』だった。

やがて、ルイズの方から唇を離した。

「終わりました」

とコルベール先生に報告する。

その後、ルイズは何人かの生徒と言い争いをしていたがすぐにサイトの耳には届かなくなった。

「うぐぐぐううー！」

思わずうめいてしまったのだ。

「熱い！」

(全く、何回やってもルーン刻まれるのは慣れないな)

しばらくしてサイトは平静を取り戻した。

コルベール先生がサイトの手を覗き込む。

「珍しいルーンだな」

サイトは「はあ……」と相槌をうった。

コルベール先生が人垣に向かって

「さてと、じゃあみんな教室に戻るぞ」

と言いつつ踵を返したのを合図にほとんどの生徒が宙に浮いた。

浮かばなかったのは言うまでもなくサイトとルイズである。

まあ、何と云ってもルイズはゼロなのである。
仕方ないのである。

ほかの生徒も口々にはやし立てるが結局できないものはできない。
こうして残されたサイトにルイズは大声で怒鳴る。

「あんな何なのよ！」

サイトは懐かしく思いながらも内心に逆らってどなり返してみる。
別に逆らわなくてもよいのだが何となくそうした方がいい気がした
からだ。

確証はなかった。

でも、自分の中の何かがそうしろと告げているようだった。

「お前こそ何だ！ここはどこだ！俺に何をした！」
と力の限り叫んでみた。

すると、ルイズは前と同じようにここのこと魔法のことなどを説明
してくれた。

どれもこれもなじみ深いものだった。

しばらくするとルイズの部屋に連れてこられた。

高価なアンティークで埋め尽くされた懐かしい部屋だ。

そこで、自分が来た世界・・・地球のことを話した。

半信半疑だったルイズも携帯やパソコン、デジカメなどを見せると
ようやく信じてくれたようだった。

（といってもM72ロケットランチャーでフーケのゴーレム倒すま
ではホントに信じてちゃいないんだろっけど・・・）

「とにかく。しばらくはお前の使い魔とやらになってやる」

「なによそれ」

「ありがたく思え」

「口のきき方がなっていないわ」と可愛げな仕草をする。

「あなたは雑用。ご主人さまの手となり足となり働きなさい」

「コラ。ふざけるな」

そう言うとおっさり流された。

「はいはい。さてと、しゃべったら眠くなっちゃった」

ルイズは小さくあくびをした。

「ちよつと待て。俺はどこで寝ればいいんだよ?」

ルイズは床を指さした。

「……ごしゅじんさま?」

「なによ」

「わたくしめはどうぶつではないのですが?」

と弱弱しく反論したサイトだったが

「仕方ないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

とおっさり淘汰されてしまった。

まるで、社会の縮小図を見てるみたいだ。

しゅん、となったサイトをしり目にルイズはブラウスを脱ぎ捨て始めた。

「ちよつ……なにやってんだよ!」

なにが?と言わんばかりに

「寝るから着替えるんだけど」

と全く気にしてない様子だった。

「俺のいないところで着替えるよ！」
「使い魔に見られてもなんともないわ」
本格的に脱ぎ始めた。
思わずサイトは目をそむけた。

しかし、いくら年を重ねてもサイトはオトコノコなのだ。
再びルイズの方へ眼を向けようとしている自分に
（待て待て才人！今のお前はルイズの騎士だ。ニューアリエ落ち着け！あくまで
騎士道だ！紳士的対応をッ）
駄目だと思いつつも顔はルイズの方を向けようとしている。
（いや、違うぞ。これは首の痙攣だ。したがって今ルイズの方を見
てしまっても仕方がないのだ。）

せーので顔を向けた瞬間自分の顔に何か当たった。
レースのついたキャミソールとパンティだった。
「\$ #*○ ~!!!!」
とショートしてしまったサイトに容赦ない言葉が掛けられる。

「それ、明日になったら洗濯しといてよね」
「なんで！」
なんか悔しい。
言いようのない悔しさをぶつけるが帰ってきた言葉は
「誰があんたを養うの？」
という根本的な正論だった。

はたからざる者食うべからず、ということだろう。

結局、あれからルイズは数分としないうちに規則正しい寝息を立て始めた。

サイトは窓から入ってくる二つの月の明かりを頼りに鞆を開けた。取り出したのは寝袋だった。

こんな時のために1つ持ってきたのだった。寝袋に入り明日のことを考える。

とりあえずは歴史に忠実に且つたくさんの人を救う

それがサイトの当面の目標だった。

今まで前と同じに返していたのもこのためだったのだ。

下手にいじくって自分の預かり知らぬところで惨事を生む危険が少ない方法をとったのだ。

もちろんちよっとくらいは変えてやるつもりだ。

今の自分は多くのことを知ってる。

知るものと知らざる者では天と地ほどの差がある。十分に情報を活かす。

そうすることで沢山の人を救えると思ったからだ。

「……………寝よ」

しばらくするとサイトからも寝息が聞こえてきた。

数奇な運命を知ってか知らずか
ハルケギニアの地を2つの月が妖しく照らしていた・・・

第6章 平穏な朝

サイトが起きて初めに目にしたのはルイズの下着だった。

「ったく、ちつとは恥じらいつてものを・・・」
と言いつつソレを放る。

続いてサイトは自分の着替えに取り掛かる。

何と言っても自分の鞆の中にはいろいろと物騒な物や管理がよろしくないとまずい物も多数あるので極力ルイズが起きてくる前に着替えなくてはならない。

と言ってもシャツの上にするその長いコートを羽織るだけだが・・・自分の腰にはナイフを7本とエアガン2丁下げた。

弾が満タンなのは勿論予備の弾も200ほどまとめてポケットに入れておいた。

背中にはアノ鋼鉄の槍をくりつけた。

短く調節しておけばかつての相棒デルFRINGERよりも短い

サイトはデルFRINGERが手に入ったら×印のように背中に二つくりつけようとしていた。

(とまあ、そんなことは今はどうでもよろしくて・・・と)

鏡を見てコートで上手く武器隠れていること確認したサイトは満足そうにほほ笑んだ。

次にベッドで寝息を立てているであろうご主人さまを起こしにかかる。

ベッドで安らかな寝息を立てているルイズを覗き込んだサイトはドキッとしてしまった。

こっ、なんとというか起きている時にはない一種のフェロモンのようなものに参ってしまったのだ。

あどけない寝顔といい口元に垂れているよだれといい・・・

一瞬デジカメで撮っておきたいという衝動に駆られるがそれはいくらなんでも、と思ったので

今日のところは止めておくことにした。

しかし、こっちは車はもちろん電気などもないため自然環境も崩れておらず実にすがすがしい。

窓を開けるとそこはかとなないよい香りと澄んだ空気が入ってくる。

「さて、ではでは」

ルイズの寝ているを思いつきり引っ剥がした。

「うにゅ」

という声が聞こえた。

が、これでもまだ起きないらしい。

第二手段としてマシユマロのようなほっぺをつなつてやる。

「にゅう、にゅう」

「・・・？牛乳か？」

何か言ってるようだが起きる気配は不思議としないので強行手段をとってみる。

最終手段

鼻つまみ!

なんかシヨボイようだがかなり効くのだ。

ちよこん、と存在している可愛らしい鼻をつまんで待っていると

「ぷっ・・・プッハー！ハアハアハアハアっなに？なにごとっ!？」
顔を赤くして起き上った。

「朝だぞ。貴族でメイジなお嬢様」

「ほえ？あ・・・朝・・・てかあんた誰？」

忘れるな!と言いたいところだがぐっところえてた。

「平賀才人」

「ああ。そつか。昨日召喚したんだっけ」

と言いつつ起き上りあくびを一つすると

「服」

と命令する。

昨日、椅子にかけられたままの制服をベッドに置いてやる。

「下着」

「自分でとれよ!」

「下着」

「自分でとれって!」

「下着」

あくまで使い魔をこき下ろさなければ気が済まないらしい。

こんちくしょう、と思いつながらも下着を取ってやる。

ベッドに向けて投げてやるとルイズは不思議そうな声を出した。

「どうした？パンツでもなかったか？」

「じゃなくて、あんたどうして下着の場所知ってるのよ？教えたい？」

内心しまった！と思いつつも平静を装う。

「下着ついたら一番下の引き出しと相場が決まってるようなもんだからな」

とごまかした。心臓バクバクものだ。

当のルイズは

「そっ」

と納得してネグリジエを脱ぎ始めたのであわててサイトは背を向けた。

下着を身に着け終わったらしく次の命令をサイトに下す。

「服」

「さっき渡しただろ？」

「着せて」

「はぁー・・・箱入り娘かってんだ」

そう言えばこんなこともあったなあとおきらめに似た心境で着せてやる。

もちろん悪態をつくことも忘れない
どうせこちらは使い魔あちらは主人
逆らうだけ無駄というものだ。

しかし、悪態くらいはつかせてもらわないとストレスがたまって仕

方がないのだ。

着せ替え人形よろしく服を着せたサイトとルイズが部屋を出ると炎のような赤い髪の子が出てきた。

自分とあまり背の変わらない魅力的な女の子だ。

清楚な雰囲気をもったルイズとは対照にこっちはその、なんというかあまりにも色気がありすぎるといっつか・・・
とにかく17才の高校生にはいささか過激なものがある。

「おはよう。ルイズ」

ルイズは顔をしかめて挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

そう。

この女の子はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー

ルイズとは家柄の問題もあり犬猿の仲なのだ。

・ まあ、実際はいやよ、いやよも好きのうち、というやつなのだが・・・

「あなたの使い魔って、それ」というキュルケの馬鹿にしたような質問にルイズはさめたような口調で返す。

もうキュルケは爆笑ものだ。

サイトは切なくなつた。

切なくなりキュルケの胸をしてみる。

続いてルイズの胸をしてみる。

「はぁー、メロンとレモン以下か・・・」
そんなサイトの呟きが聞こえたのかそれともキュルケの失礼な質問に対してなのか
ルイズの透き通るような頬が赤くなった。
その時、キュルケの部屋から何かが出てきた。

キュルケの使い魔。
サラマンダ のフレイムだった。
ルイズに対しキュルケは自慢を始めた。
フレイムがサイトの目の前に来た。
思わず尻もちをついてしまった。

「おっほっほ！あなた、火トカゲを見るのは初めて？」
サイトも言葉を返す。
「危ないから鎖につないどけよ！」
というサイトを笑う。

「ねえ、あなた名前は？」
キュルケがしゃがんで聞いてきた。
その、この状態でしゃがまれると。と視線が一点に集中しないように必死に目をそらして答える。

「平賀才人」
変な名前、とだけ言ってフレイムを従え去っていった。
(はぁー、あの胸は反則だよなあ)
よこしまなことを思うサイトとは違いルイズは悔しがる。

よほど平民を呼び出したのが悔しかったと見える。

その後ルイズにした質問もはぐらかされてしまった。

（『ゼロ』なんて不名誉な二つ名をつけられているから当然といえは当然・・・か）

1人納得するサイトをしり目にルイズはドンドンサイトを置いていく。

「おい、ちよつと待てよ！」

「知らないっ！」

二人の生活はまだ始まったばかり

これから起こる出来事が信じられない平穏な朝だった。

第6章 平穏な朝（後書き）

今日、ランキング見て驚きました。

昨日のユニークアクセスにこの小説が最初のページにあったのです。
涙ものです。

これもひとえに読んでくださる皆様のおかげだと思います。

本当にありがとうございます。

矛盾・トンデモ・・・何でもありの小説ですがどうかお付き合いくださいませ。

第7章 回避不可の決闘

キユルケと別れたあと二人は食堂に来ていた。
アルヴィーズの食堂である。

そこで、サイトは貧しい施しを受けた。
さしずめテーブル下のサイト。テーブル上のルイズという構図ができた。

今まで柔らかいパン
贅沢なスープに慣れすぎたサイトは久しぶりの仕打ちにホロリと来た。

(うつうつ、こんなこともあったな。ひもじい。ひもじすぎるよ。母さん)

持ってきた貴重な食料に手をつけるかどうか迷ったが結局やめておくことにした。

我慢はできるのだしそろそろ・・・

使い魔のせいで遅刻しそうになると言いたげに文句を言うルイズを急がせて
教室へ向かう。

ホントはコルベール先生が俺のルーンを調べてきたせいなのに・・・
嘆いていてもはじまらない。

この世界に使い魔保護法などありはしないのだから

授業中ミス・シュヴルーズにルイズは当てられサイトの期待を裏切ることなく

大爆発を起こし教室を半壊させるという所業にサイトは大笑いした。

「ぜろぜろ。ぜろ口のルイズは魔法使い。魔法の使えぬ魔法使い。あつはつはつ」

やってはいけないと思いつつもやってしまうサイトの性格は生まれ変わってもどうにもならないものらしい。

朝食のお返しとばかりに小唄をうたってやったら飯を抜きにされた。

「ゼーッタイご飯なんかあげないんだからっ」

とぷりぷり怒って使い魔をおいて行ってしまった。

「はぁー、ミスったな。ドンマイ。俺」

一人広場で佇むサイトがいた。

「こうなったら持ってきた食糧でも食うか。でもなー、そろそろ・・・」

何かを待ってるように一人考え込むサイト。

「あの、どうなさいました？」

可愛らしい女の声が聞こえた。

キタ

!!!!

サイトは待ってましたとばかりに弱弱しい声で言う。

「うん？ちよつとお腹・・・空いただけ」

キョトンとした顔でサイトを見る女の子

トリステイン魔法学校のリアルメイドさん

シエスタだ。

「あなた。もしかして、ミス・ヴァリエールが召喚した・・・」

「そうだけど・・・君は？」

分かっているくせに質問してしまうという行為に笑いそうになるがここで笑っては変に思われるので

必死にこらえる。

「この学校のメイドをしている者です。シエスタって呼んでください・・・あら？どうなさいました？」

顔に出ていたかとあわてて平静を装う。

「シエスタね。わかった。俺は平賀才人。サイトって呼んでくれ」

「はい。それで、サイトさん。お腹すいたって言ってましたよね」

「うん。言ったけど」

「賄い食ならご用意できますけど・・・召し上がりますか？」

「なんですと！」

と言いながら心の中ではにんまりとする。

そう、サイトはこれを待っていたのだった。

その後、シエスタについて行きマルトー親父特製のシチューとパンをもらったサイトはシエスタの手伝いをする。

「貴族の方にお出しするケーキですわ」

箱の中を見てみるとよだれが出てきそうなケーキが箱いっぱいに入っていた。

早速食堂で配り始める。

数分をかけて配ったケーキは箱の中からほとんど姿をくらしませんでした。

ここで、最初の目的を達成することとなる。

「ギーシュ！お前一体誰と付き合ってるんだよ？」

キザっぽいしぐさをする少年の周りを数人の少年が囲んでいた。

「ハハハッ。僕は特定の人と付き合うことはできないよ！花はみんなのものだからね。独占することなどできないものなんだ」とバラをくわえる。

ナルシストだ。ナルシストがおるよ。

見てるこっちが恥ずかしくなるくらいナルシストツブりだ。

その様子を見たサイトは、思わずそんなことを思っていた。

（俺がいた時代も見栄っ張りなのは変わってなかったが・・・これが若さか？）

そんなキザ男、ギ シュから何かが落ちた。
香水の瓶だった。

それを、拾い上げ

「おい。落ちたぞ！色男」

尚もこちらを見ようとしないギ シュに

「コラ！香水の瓶が落ちたつってんだろ！ボケナス！」

その後は前と同じように頬を叩かれワインをぶっかけられ
爆笑ものだった。

香水の瓶をテーブルに置いて去ろうとするサイトにギ シュが怒鳴
る。

「君が軽率なことをするから2人の女性が傷ついてしまった。どう
してくれるんだ!？」

サイトも負けじと怒鳴り返す。

「どうしてくれるんだといわれてもねえ。それに泣き目で言われて
も・・・だいたい、お前が二股かけるのが悪いんだろ！」

多少語尾を強めてみた。

もちろん、演技である。のだがちょっとルイズを馬鹿にされたのに
はカチンときた。

その後、決闘だ！決闘だ！というギ シュの提案にのりヴェストリ
の広場に来ていた。

「サイト！やめなさい！死んじやうわよ！」

ルイズが今にも泣きそうな声で叫ぶがやめるわけにはいかない。

「大丈夫だ！お前が馬鹿にされた分までしっかりお返ししてきてやるよ！」

前にさっと出る。

ギ シュがバラをさっとふる。

その途端ワルキューレが出てきた。

「僕の二つ名は『青銅』従って、青銅のワルキューレが君をお相手するよ」

言い終わった後またキザっぽくバラの杖を加えた。

出てるワルキューレは一体のみ

俺もなめられたもんだなと思う。

なんでワルキューレ……しまった。

ここでサイトは重大なことに気づく。

青銅は硬度面で見れば鉄に劣る物質だ。当然、今のサイトなら身体に隠した武器で倒すことは勿論素手でも倒すことはさほど苦ではない。

ましてや今のギ シュはドットメイジ。

前の世界で最強の名を冠したサイトなら倒せない方がおかしい。

しかし、ここで剣を使って勝たないとデルフリンガーが手に入らないかも、という考えが浮かんだ。

やられたふりをしてギ シュが剣を出すまで待つかという考えもある。

るがいまの最弱ワルキューレが
自分の身体に傷を負わせられるかどうか疑問だ。
ただの平民に貴族のワルキューレが傷を負わすことすらかなわな
かったでは怪しいと思われるのは間違いない。

考えに考えた末

サイトは一つの妙案を思い付く

第8章 教師の思考

その様子を『炎蛇』ことコルベールとトリステイン魔法学院院长であるオールド・オスマンは『遠見の鏡』でこの一部始終を見ていた。既にコルベールからサイトがガンダールヴ（かも）であることを聞かされていたオールド・オスマンは教師たちが使用許可を求め、『眠りの鐘』の使用をあえて許可せず二人の動向をのぞいていた。

オールドオスマンは聡明な人柄であった。

それゆえにサイトが本当にガンダールヴであるかを見極めようとしていたのだった。

何せガンダールヴといえば伝説の使い魔

並のメイジでは歯が立たず1000人も軍隊相手に1人で立ち向えるほど・・・という伝説が残っている。

ミスタ・コルベールはあまりの興奮に体をがたがたと震わせていた。もし、もしこれが事実であればまさに現代によみがえった『ガンダールヴ』

これが事実だと王宮の耳に入ればまさに宮廷中が大騒ぎになるだろう。

それ以前に自分の中に眠る研究者の魂が震えて仕方がないのだった。

とにかく、ギ シュがワルキューレを召喚しているのにこの平民の少年は何もする気がないかのようだ。

(まさか、素手で倒すという負けでもあるまい)
いつしか200歳とも300歳と噂される学園長の額には汗が浮かんでいた。

「すごいですよ！大発見です。大発見ですよ！」

と子供のようにはしゃいでいるのはトリステイン魔法学院に奉職して二十年の中堅教師

コルベールだ。

自分の発見に、なのかガンダールヴとメイジの戦いに、なのか彼の興奮は頂点に達しようとしていた。

「オールド・オスマン！この戦いどちらが勝つでしょうか」

「無論。メイジじゃろ」

オールド・オスマンは内心ではサイトが勝つ、と思っていたのだがここはメイジのプライドを守ってギ シュを応援することにした。

「しかし、あいてはあのガンダールヴですよ！？いくらメイジといえど・・・」

「コルベール君。生徒を信じたまえ。何ならかけてもよいぞ？どうかな」

サイトが勝つに決まってる！と言わんばかりのコルベールに賭けを提案する。

サイトが勝つのは必然だと思っているコルベールは勿論受け入れる。

「では、あの平民が勝つたらわしがおごろう。ギ シュが勝つたら君が……」

「分かりました。お店は勿論……」

二人は気持ちの悪い笑顔を浮かべてにんまりする。

もともと二人は夜な夜な女の子がいる店に通っては……要するに二人は飲み仲間なのである。

しかも、二人は教師である。

どちらが勝ってもそれほど痛手ではないのだった。

妖しい夜に向けての思いを巡らせる彼らと違い『遠見の鏡』の中では緊迫感に包まれていた。

教師とは思えぬ笑みを浮かべる二人はまもなく啞然とするのであった。

そう……伝説の前に……

第8章

教師の思考（後書き）

第9章 ドットメイジとガンダールヴ

サイトはにやりと笑っていた。

「なあ、貴族。俺には武器がない。だが、お前には魔法という武器がある」

サイトの言葉にギ シュはまゆをひそめた。

「それがどうしたかね？平民が

サイトはギ シュの言葉を遮った。

「その丸腰の平民相手に魔法を使わないと勝てないのか!？」
周りの生徒のたちにも聞こえるように大声で言った。
たちまち周りの人々から声上がる。

「卑怯だぞ！ギ シュ。丸腰の平民相手にワルキューレかよ！」

「見損なつたぞギ シュ！これじゃ決闘になってないじゃないか！」
生徒たちは口々にわめいた。

そんな生徒たちをみてにやりとする。

ギ シュに目をやると卑怯だと言われたことが我慢ならないのか唇をかみしめていた。

「ならばッ!!」

サイトが声を張り上げると一斉に生徒は口を閉じた。

「俺の国には『敵に塩を送る』という言葉がある。人の弱みに付け込まず逆に苦境から救い出す、という意味だ」

「それがどうしたね？」

は？何言ってるんだコイツ、という視線がサイトに集まる。汗をかきながらサイトは続ける。

「つまりは、俺にも何か武器をよこせ、という意味だ！」

「そんなことかね！それならそうと早く」

ギ シュが杖を一振りする。

たちまちサイトの前に剣が現れた。

「これでいいかい？ならば始めようじゃないか」

ギ シュは半ば人氣が落ちなかつたことに安堵しながらそう告げた。

「平等に戦ってこそ貴族だ。・・・来い！！」

かつての自分を思い出しながら言った。

「行くぞ！！！平民！！！」

「平民は余計だア！！！」

ギ シュのワルクューレがサイトに向かってくる。

太陽の光を浴びてきらめく青銅の肌はなるほど、確かに美しいといえた。

槍を持たないワルクューレが一体

ガンダールヴをなめすぎだろ、とサイトは思う。

知らないのも無理はないのだが・・・哀れに思えてしまう。

ワルクューレの拳がサイトを襲う。

サイトの腹にワルクューレの拳がめり込む。

すごい音がした。

一発くらいは受けてやるうと思ったのだ。

「ぐふっ……」

「サイト！」

ルイズが叫ぶ。

……あれ？痛いぞ？

普通に痛い。

前ほどは痛くないかも知れないがそれでも痛い。

確かに体には傷一つついていないがこれはこれで痛い。

ふと、ワルキューレの拳を見ると一目でわかる方がいらっしやるかも知れないが
召喚時と比べて若干拳がつぶれていた。

（ヤヴェー！！こりゃ、早く勝負つけねえと）

剣を持ち構える。

サイトが編み出した……と言っても我流だが一応構える。

刹那

瞬動を使い一瞬でワルキューレの背後を取る。

ギ シュから周りの生徒から、そしてご主人さまから声が漏れる。

一瞬でワルキューレを5回切りつける。
あまりの早さに気づけた者はいなかった。
あの『雪風』の二つ名をもつタバサにすら気づけなかったほどだ。
ほかの生徒が気づけないのも無理はない。
そして、一瞬にして地に帰るワルキューレの残骸、気づける方がおかしい。

自分のゴーレムが一瞬にしてやられるとは思ってなかったギ シュは動揺する。

が、瞬時にして平静を取り戻す。

杖を振り自分の最高数である7体を召喚する。

一体やられただけでも屈辱なのに7体まで出さねばならないということはこの上ない屈辱と言えただろう。

ギ シュの顔に悔しさが浮かび上がる。

「行け！我がワルキューレたちよ！あいつを倒せ！」

ギ シュがわめき散らす。

そう、このときギ シュはあいつを倒せとワルキューレたちに命令した。

そして、ワルキューレたちは命令どおりにサイトに向かって行った。

その後の状況がうまく飲み込めなかったのはギ シュとサイトの後ろで観戦していた生徒たちだけだろう。

ギ シュは7人ものワルキューレたちに囲まれたサイトがよく見えなかったので仕方がない。

ましてや、自分の後ろにサイトがいることなど分かるはずもない。ギ シュは自分に向かってきたワルキューレたちに驚いた。

「わわっ、お前たち何してるんだね！？こ、こっちに平民はいないぞ！？」

正確にはギ シュの後ろに立っているサイトに向かっ_てきているのだが今の彼に気づけるとは思えなかった。

周りの生徒など声も出ないありさまだ。

あと少しでワルキューレが来る、というところでギ シュの肩をポンポンと叩く

案の定

「何か用かい！？今は決闘中だ！邪魔しないでくれ！」

と自分の方を見ようとせず前方にばかり目をやるギ シュにサイトはにやりとして囁く

「ほお。で、君は一体誰と闘っているんだね。ギ シュ・ド・グラモン閣下？」

閣下のところを強調してギ シュに尋ねる。

「わあああああああああ！！！な、なぜ平民がっ！？」

こちらを振り向くギ シュ。

そして、サイトを殴り倒さんとするワルキューレの拳があった。

サイトは当たりそうになる拳にギ シュの顔を持って行ってやった。

ベグツ、という恐ろしげな音が聞こえた。

「あの、大丈夫ですか？ギ シュ殿？」

既にワルキューレから囲まれてしまっている二人の姿があった。

倒れかけのギ シュをサイトが支えている状態だ。

ギ シュは、といえは笑っているようなそれでいて泣いてるような顔だ。

時折口からはよくわからない呪文が漏れ出している。

さらに、まずいことが起こった。

半分意識があるが半分はないような状態なのでギールレが暴走し始めたのだ。

サイトたちを囲んでいたワルキューレは四方八方に散開し生徒たちを襲い始めた。

それほどあわててない様子で

「こりゃ、まずい」

と呟いたサイトは剣を構える。

その瞬間

サイトの立っていたところは草と土が盛り返されたようになっていた。

そして、その上に危ない感じのギールレが倒れる。

「ギョルンッ」

なんとも不思議な言葉を発した後地面に大の字になったギールレ。

哀れである。

サイトの剣が次々とワルキューレを倒していく。

今度はスピードを落とすなんとか目に見えるようにする。

要するに自分のご主人さまに『俺、強いですよ?』『アピールをしよう』という訳だ。

なんともいけない性格である。

辺りには「キヤアアアアー！！！！」とか「わああああ！！！！」とか言う悲鳴に満ち溢れていた。阿鼻叫喚とはこういうことを言うんだろっと思いつつ6体のワルキューレを倒したサイトは最後の一体がルイズに襲いかかるうとしていたのを目の端でとらえた。

「きゃあああっ！」

と可愛らしい悲鳴を上げ後ろに尻もちをつく。ワルキューレの拳がルイズの顔に当たる瞬間咄嗟にルイズは目を閉じた。

当たる、と思っていた拳はいつまで待っても来なかった。

「え……？」

目を開けてみると自分の使い魔が目の前に立ち素手で拳を受け止めているではないか

「大丈夫かよ？ルイズ」

驚いて思わず目を見張る

「え、ええ」

「そりゃ、良かった！」

そう叫んだサイトは右に持った剣でワルキューレを切り裂いた。

すべてのワルキューレを倒したことを確認したサイトは後ろを振り向き

尻もちをついているルイズに左手を差し伸べるサイト。

「あ、アリガト・・・」

しびしび、と言った様子でお礼を言う。

そのしぐさにドキッとしながらもルイズを引き上げた後剣を地面にさしこごう叫んだ。

「勝利ッ！」

サイトの勝利を祝うかのように地面に刺された剣の刀身が太陽の光を受け

美しくきらめいていた。

そして、その光はこれからのサイトの行く末をたたえているかのよう
うにいつまでも輝き続けた・・・

そして・・・ギ シュはその後もしばらくは眠り続けましたとぞ。
めでたし、めでたし・・・なのだろうか？

第10章 疑問深めしガンダールヴ

ギ シュを倒したサイトはルイズと共に部屋へと戻ってきていた。ルイズが部屋に入った時の第一声は

「あんた何勝手に決闘なんかしちゃってるの!？」

サイトとしては返す言葉もないわけでそんなわけで弱弱しく反論なんてしちゃってみたい・・・

「で、でも貴族倒したんだし・・・大目に見てほしいって言うか」

「ギ シュ倒しただけで待遇変わるとでも思ってるの? オメデタイんじゃないの? 馬鹿じゃないの? アホじゃないの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、」

(サイト・・・思い出美化しちゃってました。そうです。ルイズはこんな子でした)

「犬が二度とこんなことしないように躡しつしなきゃ・・・ね?」

そう言っつてルイズが笑いながら取り出したのは・・・はたして鞭であつた。

しかも、対人用ではなく乗馬用の鞭であつた。

「あのう、ルイズさん? つかぬことをお聞きしますがその鞭は何に使うので・・・?」

ルイズは極上の笑みをたたえてのたまつた。

「悪い犬には体で覚えてもらわなきゃ・・・ねっ！」
サイトの肩に容赦なく鞭が振り下ろされた。

「ギャーーーーーッ!!!」
痛い。ギ シュのワルキューレより痛い。

「犬はわんでしょうがっ！」
「うっ、うわああああおおおおんっ！」

こうして、ご主人さまと使い魔の夜が明けていく・・・

翌日

ご主人さまに食事又キを宣告されたサイトはシエスタとマルトー親父にご飯をもらいに行っていた。

そんなサイトをほかのコックやメイドたちも快く迎えてくれた。
マルトー親父なんかは

「シエスタ！我らの剣にアルビオンの古いのをついでやってくれ！」
『我らの剣』などと呼びしまいには貴族と同じ食事をサイトに与える。

シエスタはシエスタでマルトー親父に言われたとおりワインをついでくれたり

食事中、サイトの方をじーっと見続ける始末だ。

サイトもサイトで暇を見つけてはルイズには内緒で入り浸ってるのだった。

ルイズにばれたら即鞭打ち折檻コース行きだろう。

そんな中一人の若いコックが外に何かいることを発見した。
そして、その正体がすぐ分かることとなるのだった。

数日後、いつものようにルイズから賜ったパンとスープだけでは腹が膨らまなかったサイトは
シエスタの所に行ってご飯をもらって来た帰りだった。
廊下を歩いていると前から何かかやってきた。

キュルケのサラマンダ だった。

「よお、フレイム？だっけ。何か用か？」
フレイムは何も答えずサイトをくわえると高くに持ち上げ逃げられなくした。

(前にもあったなあ。こんなこと・・・どうなるんだっけ?)

そのまま、キュルケの部屋に連れてこられる。
フレイムはそのままキュルケの部屋に入った。

「ちよっ離せつて。わっ、バカ今離すな」
宙ぶらりんな状態なので行動することができないサイト
いかに伝説の使い魔とはいえ服を加えられては何もできないのだった。

キュルケの部屋は無数のローソクの明かりに照らされていた。
宙に浮いたローソクの炎がほのかに闇を切り裂いている、というの
はなかなか神秘的だ。

ドサツとフレームに落とされたサイトは尻をさすりながら尋ねる。

「え、えーと・・・何か用？」

（ヤヴェエエ！！！！この後の展開思い出したああ！！）

そう、前の世界では強引に迫られキキキキ、キス・・・をされてしま
うのだ。

そこヘルイズがきて・・・

とにかく、サイトこの危機的状況を打破します。

「ねえ、サイト。いつまでもそこで突っ立ってないでこちらにいら
してっ。」

前と同じように誘われる。

（行かないと不自然・・・だよな？）

どうしようか考えつつ言われたとおりにキュルケの待つベッドに向
かう。

サイトがベッドに言った瞬間キュルケはサイトの手をつかみ一気に
まくし立てた。

マドリガルを作っただとかサイトのことを好きなのだとかそんなことを一気に・・・

途中窓から入ってこようとした男子生徒をフレイムとキュルケの魔法で撃退してたし・・・

「とっ、とにかく！俺は帰ります！以上！」

と言って帰ろうとすると腕をむんずとつかまれた。

「ああ〜ん。そんなこと言わないで・・・語らいましょ？ね？」

強引にサイトの手を自分の胸に持っていくあたり慣れている。

何とか断らなきゃ。何とか断らなきゃとサイトは頭を使った。

おそらく自分史上最大級におつむを使ったことだろう。

そして、キュルケの手を取り

「キュルケ。俺にも大切な人がいる。その人を裏切るわけにはいかないんだ」

サイトはかつての世界に残してきた最愛の人を思い浮かべた。

そう言ったあとキュルケの手をそっと置きドアに向かう。

ドアを開こうと手を伸ばした時後ろから声がかげられた。

「その人ってミス・ヴァリエール？」

サイトは意味深な表情をして答えた。

「さあね？」

と言った瞬間ドアがバンツ！と開かれた。

現れたのはルイズだった。

思わず手を挟んで声にならない声を上げるサイト

「# \$ % & ~ ! ! ! !」

「帰るわよ！サイト！私の使い魔が邪魔したわね。キュルケ」
痛切な痛みを顔に浮かべたままのサイトを引きずりドアの向こうへ
と姿を消した。

あの真剣な目・・・素敵だったわあ
ますます、気にいっちゃったっ

でも・・・

「大切な人・・・か」
と呟く。

髪を指で弄びながら

「いったい誰なのかしらね？フレイム」
自分の使い魔はただ鳴いて答えるだけ

こうして、また夜の闇が深まっていく
ハルケギニアの月もキュルケの疑問には答えられないに違いないの
だった。

第11章 不穏な虚無の曜日

今日は虚無の曜日

つまりは学生稼業はお休みなのである。

そんなめでたい日にルイズはこんなことを言い出した。

「あんに剣買ってあげるわ」

サイトは嬉しくなった。

かつての相棒デルフリンガーに会えるのだ。

もちろん返事は決まってる。

そんなわけで二人は馬に乗ってトリスティンの城下町に向かっていった。

ホントはサイトが抱えて走った方が早く着くのだがもちろんそんなことはしない。

前の世界でもしなかったしできるとしてもルイズの方が拒否するだろう。

そう思いながら馬を走らせるサイト

いずれにしても笑みがこぼれて仕方がないのだった……

一方、トリステイン魔法学院学生寮

キュルケは自分で壊した窓を見て物憂げな表情をしていた。

(サイト、今頃どうしてるかなあ)

キュルケの二つ名は『微熱』

昨日の逢瀬が忘れられず体もほのかな熱を宿していた。

「そうだわ。デート。デートに誘いしなきゃ」

今日は虚無の曜日

サイトを誘うにはこの上もない日である。

絶好のデート日和をいるかも分からない神様に感謝しキュルケは自室を出た。

もちろん、男を落とすための化粧も忘れず・・・

ドアの前に来たキュルケはドアにカギがかかっていることを確認したのち『アン・ロック』の呪文を唱えた。

ホントはしてはいけない事なのだが規則なの我関せずとばかりに唱えた。

恋の前には規則などあってないようなものなのだ。

「サイトー？いらしゃるの？私またあなたの・・・」

サイトどころかルイズの姿もない。

そっと、窓の外をのぞいてみると馬に乗ってどこかへ出かけようとしているルイズとサイトの姿が目映った。

「何よ？お出かけしちゃうの？」

一瞬不満そうな顔をした後頼りになる人が脳裏に浮かびにやりとする。

しかるのちにキュルケは急いでルイズの部屋を後にした・・・

一方、宝物庫の扉を調べていたオールド・オスマンの万能秘書ことミス・ロングビルは

自分の『アン・ロック』が全く通用しないことを知り諦め別の方法を考えようとした時ひょっこりコルベールが顔を出した。

ちよつと、おだてて話をしてやればミス・コルベールは驚くほどの情報を与えてくれた。

（まったく、ちよろいものね）

ミス・ロングビルはそのあとモルベールをおだて続けた。

自分のゴーレムでも通用しそудだということを知ったミス・ロングビルは早々に会話を打ち切った。

「あつ、わたくし用事を思い出しましたわ。失礼しますわね」といゝ去ろうとする。

その間際

「ミスタ・コルベール。舞踏会、楽しみにしておりますわ」

もちろん出るつもりはさらさらない。がここではあえてそう言っておく

後には、幸せそうなコルベールだけが残ったという

一人になったミス・ロングビルは不敵な笑みを浮かべどこかへと去っていった・・・

それが、何を意味するのか

これから何が起こるのか

知る者は誰もいない・・・そう、彼以外は・・・

第11章 不穏な虚無の曜日（後書き）

ちよつと原作とは時間が変わっちゃってますね。
まあ、これからは大幅に……

第12章 デルフリンガー

ここはトリステインの城下町だ。
ここには何をしに来たかというと・・・

「あつ、あつたわ」

ルイズが指さした先は剣の形をした看板だった。
サイトの記憶によれば欲の皮のつばった武器商人の親父が切り盛り
してる店だ。

まあ、それも今となっては待つかしき記憶のひとつ？だが

「ここかよ」

サイトのつぶやきが聞こえたのか常に注意していたのかは分からないが

「何か言った？」

凄じト目で見られてしまった。

「いえいえ。何も言っただねえでございますよ？お嬢様。ささつ、私
めのために買って下さるといふ武器を拜みに行きましょうか」
サイトは武器屋の扉を押して入った。

良くも悪くも懐かしき顔があった。・・・いや、とても悪い顔だ。

「ありやつ？貴族様でございますか？」

店主のガマガエルみたいな顔が好奇の表情に変わる。

「そうよ。今日は使い魔に剣を見繕ってもらいに来たの。何かいい
のはあるかしら？」

ルイズが言った途端店主はニヤつとして店の奥へ消えていった。

「かしこまりました。しばしお待ちを」

しばらくしたのち店主が抱えて持ってきたのは
鋭利ながらも美しく高貴な気品を携えたかくも美しいレイピアだっ
た。

店主は

「かのゲルマニアの」

とかなんとかの文句をずっと言っていたがサイト自身の欲しい剣は
決まっていた。

「もっと太くて大きいのがいいと言ったのよ！」

の一言で店主が消えて言ったあとサイトはルイズに耳打ちした。

「ルイズ、ルイズ」

「あによ？」

ウザい、といった表情で聞き返したルイズに

「あの主人。まっとうな商売してないぜ？それにさ、もう欲しい剣
は決まってるんだ」

そうなの？といった表情でルイズは聞き返してきた。

「どれよ？」

「この店に入ったときからビビッときてたんだよな。コレだこれ」

と言っ ていかにもボロボロな剣がまとめておいてある古臭い樽の中
から見間違っ はずもない剣の柄を引き抜いた。

茶色い・・・だれが見ても欲しくなさそう な剣をサイトは欲しがっ
たのでルイズは驚いた。

「もつと、良いの買っ てあげるわよ！」

「これじゃなくちゃ駄目だ！」

サイトの真剣な目に驚いたのかそれとも安上がりでいいと思っ たの
かは知らないがルイズはすぐに了承してくれ た。

ルイズは剣を覗き込んで尋ねる。

「でも、なんでコレなの？なんか力があるとか？」

「それはだ、なつと！」

サイトは鞘を叩いた。

叩いた直後鞘を引き抜いてみる。

刃こぼれした剣から声が聞こえてきた。

「痛っ てえな！何しやがんでえ！」

サイトの耳に懐かしい相棒の音が届く

あまりの懐かしさにホロリと涙をこぼしそうになるがここで泣いて
しまっ たら不自然になるので必死にこらえる。

「何でえ？てめ・・・おどれーた！見損なっ てた。てめ『使い手』
か」

「ああ。デルフリンガーだよな？」

「おうよ！俺こそが・・・っててめ何で俺の名前を？」
表情・・・というものはないが刀身からどことなく首をかしげている様子が脳裏に浮かんだ
もちろん、デルフリンガーの疑問に具体的に答えるつもりもないためサイトはこう答えた。

「俺がお前の『相棒』だからじゃねえのか？」
そう答えるとデルフリンガーから満足げに

「おうよ！」
という返事が返ってきた。

そこへルイズが
「ちよつと、ちよつと。私を無視して話しこまないでよ！どついう事なの！？」
「どついうことだよ」
そう言っでデルフリンガーを見せる。

「『どついうこと』じゃないでしょおがー！！！！」
「相棒、こいつが相棒のご主人さまかい？」
「そうだよ。怖いだろ？」
「ハハッ、ちげーねー」

そこへ店主が戻ってきた。

「おう。この剣に決めませ！百でいいだろ？」
突然のことに驚いた店主だったがサイトの手に握られていたのが商

売の邪魔をするデル公だったので
満足げにならずいた。

「へえ。そいつなら百で結構でさあ」
そう言う店主にルイズが金貨を渡す。

そして、恭しく礼をする店主を残しサイトたちは店を後にした。
デルフリンガーという新たな仲間を手にして・・・

第13章 キュルケのお買い物

武器屋からでて来たルイズとサイトをタバサの使い魔『風韻竜』シルフィードに乗ったキュルケがジツと見ていた。

キュルケはサイトが背に背負っている剣を目ざとく見つけるとすぐタバサにお願いして町の近くまで降りてもらった。

自分もサイトに剣をプレゼントしようと思ったのだ。

「ねえ、タバサ。私、ちょっと町まで行くのだけど、あなたどうする？」

キュルケは自分のちよつと不愛想で読書好きな友人に尋ねる。

この小さな友人と会話を成立させるのは至難の技だ。

しかし、というかなるほどというか

タバサといるとなぜか落ち着くのだ。

「本、読んでる」

そういつてタバサの視線は本に視線を落とす。

「そう。じゃあ、すぐ戻るわ」

と言って自分は町に入っていく。

町に入ったキュルケは武器屋を目指す。

目的は勿論ヴァリアルよりもいい剣を買ってサイトを言ばせることだ。

お目当ての店はすぐ見つかった。

(案外、汚い所ね)

そう思いながらも恋のためだと扉を押した。

途端、店の奥から声がした。

「ありや、今日はどうかしてる」

いかにも、商売人といった顔が迎えてくれた。

「今日はどうなさったんで？」

「剣を見繕ってほしいのよ。前にきた貴族よりもずっといい。ね」

「へ、へえ」

店主は店の奥に飛んで行った。

前にきた貴族には売れなかった剣を売ってしまおうという魂胆だ。

その間キュルケは手持無沙汰になったので店内を見回してみる。

そこらじゅうに剣や訳の分からん芸術品？ばいものがある。

(ヴァリエールはどれ買ったのかしらね？)

「へ、へえ。お待ちしました」

店主が見せたのは宝石や鋳物がふんだんに使われた美術品と言ってもよい剣だった。

また、剣に関するうたい文句を述べる店主の話を聞いていると本当にいい剣だと思い始めてきたキュルケはこの剣をサイトに送ることにした。

「おいくら？」

「へえ。エキュー金貨で三千。新金貨で四千五百でさあ」

「店主？お値段張りすぎではございません？」

「へえ。しかし、良剣は……」

キュルケはスカートを持ち上げてみる。

要するに色気で、という訳だ。

「おいくら？」

「お、値段間違えておりやした。二千五百で」

さすがに強欲商売人でもキュルケの色気にはかなわなかったと見えどどん値段を下げ始めた。

「二千」

「熱いわね？」

そう言うとう自分のブラウスのボタンをひとつ、またひとつと外し始めた。

プチン、プチンという何とも艶めかしい音が店内に響く。

あと一つ、あと一つという男心が値段を下げさせる。

「千五百……いや、千二百！」

「千よ」

キュルケが店主の手を自分の胸に持っていく。

その瞬間、店主のハートが何かに突き破られた。

ズキュウウウウウン！！！！

「せ、千でさあ……」

消え入るような声で言う店主の前に金貨を置いて自分は服装を整えて店から出る。

後に残った店主は、悪態をつきながら酒を引き出しから出してぐびぐびとやり始めた。

そして、キュルケはと言うと自分を待つ小さな友人の元へと駆け出していった。

ただただ、足を動かして。

人込みをかき分けて。

親友と呼べるものの元へ……

第14章 目撃するガンダールヴ

さて、今サイトは苦渋の選択を迫られている。

最終的な答えは決まっているのだが・・・二人の言い合いを聞いていると昔の自分はよく『二つとも』とか言えたよなあと思う。

これが若さか？

いやいや、今の自分若いじゃん

と一人漫才心の中でライブ（主演主催サイト）を行っている二人から

「じゃあ、あんたはどっちなの？」

「ねえ、ダーリン・・・どっちがイイの？」

と揃えて聞かれた。

意を決して、と言うべきか・・・

あるいは腹をくくった、と言うべきか・・・

はたまた、我が魂の故郷清水の舞台から飛び降りる気で・・・と言うべきか

「えっと・・・どっちもってダメ？」

わかってたさ。

どっちにしるこうなるって分かってたさ。

現在平賀才人に地面はありません。
ぶら下がっております。

ええ、ぶら下がっていますともさ。

風を受け眼には涙を浮かべおまけに下には杖を構えた二人が・・・

「行くわよサイト！ちゃんと当たりなさいよね！！！」
縁起でもない。

あたったら・・・当たるわけではない（と思うが）死んでしまう。

かといって、キュルケの『フレイム・ボール』が当たってもまずい
ことになる。

ちゃんとロープのみに当ててくれよ？と心の中で叫んでみる。

結果、ルイズは壁に

キュルケは見事？にサイトを救ってくれた。

その後はルイズは地団駄を踏みキュルケはキュルケで

「ダーリン この剣、使ってね」

半ば無理やり凶悪な胸付きでサイトに押し付けてきた。

そんな和気あいあいとした空間をぶち壊す者がやってきた。
そう、奴である。

サイト以外の者は啞然としてその様子を見守っていた。
サイトはサイトで

(さて、どうすっかなー)
とのんきに考えていた。

あほみたいに馬鹿でかいゴーレムが宝物庫のヒビに(このヒビはルイズがやったもの)穴をあけ
飄々とこの学園の宝『破壊の杖』をマントを着たメイジが盗んでいった。
その後は、ドシン、ドシンという効果音を残してどこかへ去って行ってしまった。

「えっと……どうするんの？アレ」

「さあ？ほっとけばいいんじゃない？」

「きつと、トライアングルメイジ」

とその場にいた三人で言い合い
ルイズは、と言うと

「どっなってんのよ~~~~~!!!!」

ハルケギニアの月に向かって吠えていた・・・

第15章 捕獲と協定（前書き）

実は、今まで書いて来て思ったのですがこのままでは
原作と一緒にだろ！と思いきりオリジナリティを出すことにし
ました。

オリキャラは出てきませんが・・・

そこで、今回賛否両論あると思いますが（否しかないかも）

そこはご了承ください。

それでも良いと思った方のみ・・・どうぞ！

第15章 捕獲と協定

翌日、昨日の騒動を見ていた3人の貴族と1人の使い魔+喋る剣は
オールド・オスマンに呼ばれここ学院長室まで来ていた。

「それでは、君たちがあの『土くれ』を見たのかね？」

3人の少女たちは口をそろえて言う。

「そうです！あいつこそが『土くれ』のフーケに違いありません」
サイトとしてはこれからなすべき事を必死にリハーサルしている。
うーんと、ルイズにこき使われて〜ゴーレム倒して〜な具合だ。

途中でミス・ロングビルが入ってきて

「フーケの居所が分かりましたわ」

と何やら熱心に自分が調べてきたことを報告していた。

サイトに見ればそんなことも分かっているのだし何よりフーケ
の正体まで分かっているのだ。

おかしくって仕方がない。

このまま聞いているとホントに笑ってしまいそうになるので必死に
脳内リハーサルを繰り返す。

オールド・オスマンが、カツ！と目を開き

「それでだ。搜索隊を結成する。我こそは、と思うものは杖を掲げ
よ！」

とても目の前の老人がしゃべってるとは思えない貫禄ある声に皆が
静まりかえっている時だった。

不意に杖が上がった。
周りからはオオツという声が上がった。

「私が行きます」

サイトは見なくても分かった。

実力もないくせにこんな時だけ無茶をしたがり人一倍プライドを気にする可愛いご主人さま。

そう、ルイズだった。

そんなルイズを半ばあきれたように隣から杖が上がった。

「私も行きますわ」

その豊富な胸の谷間から引っ張り出した杖を真上に掲げサイトに流し目を送った。

次に自分の背丈よりもはるかに長くこつこつ杖が上がった。

『雪風』の二つ名をもつ青髪の少女
タバサだ。

「私も行く。二人が心配」

彼女から発せられた小さいながらも確固たる信念も含んだような声だった。

本当ならこれで全員なはずなのだがもう一人声が上がった。
他ならぬサイトだった。

本当なら杖を掲げるところだが生憎とサイトはメイジではなかった

ので代わりにカンダールヴの象徴
デルフリンガーを自分の頭上に高々と掲げた。

「俺も行くぜ！」

その、表情と掲げた剣腰にさしてあるキュルケからもらった剣が妙によく似合っていた。

「当たり前でしょ！あなたは私の使い魔なんだから」

「とかいってアナタ危険になったらダーリンにまかせちゃうんでしょ」

「そんなことしないわよ！私だって・・・」

そんな少女たちにお構いなくオスマン学院長は最後の募集通告をする。

「他にはおらんのか？」

が、職員からはだれも杖が上がらない。
仕方なしに、オスマンは捜索隊に志願してくれた3人の少女の長所をあげて激励する。

「では、これより諸君らの命運を祈る！」

その声で職員会議はお開きとなった。

ぞろぞろ出ていく職員たち

続いてルイズたちも支度をしようとして出て行った。

「サイト、早く行くわよ」

「ワリイ、ちょっと先行って待っていてくれ」

そう言っただけルイズを見送ったサイトは椅子に座っている学院長の方

へと向き直った。

しばらくしたのち、サイトもフル装備でルイズたちと合流した。

「どうしたの？」

ルイズにいろいろと聞かれたが今は

「何かなあ？腹痛くなっちゃってさ」

とだけ言ったら

「何よ？緊張してるの？あんた」

「大丈夫よ。ダーリン。あたしが守ったげるわ」

「うるさい」

いつの間にか馬車の中はこれから盗賊を捕まえるというような殺伐とした雰囲気は消え去り

和気あいあいとしていた。

「あつ、ここら辺のはずです」

情報を集めたミス・ロングビルから声がかかった。

とたんに一行にも緊張が走る。

ミス・ロングビルが指さしたのは一軒のどこにでもあるような粗末な小屋だった。

「一見普通の小屋・・・というのがいかにも賊のアジト！という感じがしないでもない」

みんなは草むらにかくれて小屋をじっと覗く。

ミス・ロングビルだけは

「辺りを偵察しに行ってくださいわ」

とだけ言い残して消えてしまった。

「とりあえず、誰かすばしっこいのが見てくる」

戦闘に慣れたタバサが指揮を執る。

「一番すばしっこいのか」というくだりで一同はサイトの方を見る。

結果、多数決の原理の前に敗れたサイトが小屋の様子を見てくることになった。

（まあ、良いんだけどね。どうせこうなることはわかっただし）

力いっぱい蹴ったら破れそうなドアをギイツと押して中の様子を覗いてみる。

「一応形式上なのですぐにOKサインをみんなに送る。」

「誰もいないわね」

埃っぽい部屋を4人が動くのだからよりほこりが舞い上がる。

「ホントにここにフーケがいたのかしら？」

自慢の赤毛を必死にほこりまみれにしまいと無駄な努力をするキュルケがつぶやく。

サイトは腰のキュルケからもらった剣にひそかに手を掛け来るべき襲撃に備えている。

そこで、タバサがなにか見つけたようだった。

「これ」

どれどれと皆が覗き込む。

次の瞬間、歓声があたりを包みこんだ。

「これ、『破壊の杖』じゃない！」

「なんか、杖って感じじゃないわね」

「私宝物庫見学の時これ見たわよ。間違いないわ」

ルイズが言い終わったのを見計らっていたようにバリバリリツ！と屋根が剥がされた。

巨大なゴーレムがひょっこりと顔をのぞかせていた。

砂糖菓子のようにあっという間に崩されていった小屋はもはや原型をとどめてはいなかった。

サイトは落ちてくる瓦礫などでルイズたちが怪我をしないよう剣で払っていた。

落ちてくる残骸は無数だがサイトは呼吸するかのようによつてのけた。

そんなサイトを見ていたタバサは

（この人、強い）

心の中でそう思っていた。

それほど思いにふける時間もなく完成した呪文を放つ

巨大な竜巻がゴーレムの身体に当たったと思いきや弾き飛ばされてしまった。

タバサはきちんと力量が見極められる。

彼女は自分の呪文が破られたと知るや否や

「退却」

と呟いて小屋の残骸から抜け出した。

同じようにキュルケも『ファイア・ボール』で応戦していたが何しろスケールが違うのである。

弾かれてしまうのがオチであった。

「無理よこんなの！」

そう叫んだかと思うとタバサと一緒に一目散に外へと駆け出して行った。

二人が逃げる中でいまだに応戦している者がいた。
ルイズである。

「ルイズ、逃げろ！」

答えは分かかっていてもサイトはそう叫ばずにはいらなかった。

「嫌よ！」

「何で!？」

毅然とした態度で呪文を放ちながら答える

「私は貴族よ。魔法が使えるものを貴族と呼ぶんじゃない」

必死に呪文を唱えては杖をふるう。

「敵に後ろをみせない者を、を貴族と呼ぶのよ！」
ルイズは心に巢食う闇をけし飛ばすように、コンプレックスを跳ね返すように叫んだ。

「死んだら・・・死んだら何にもなんねえだろ！」

サイトはルイズの背中を見た。

こんな小さな背中で何もかも背負いこんじまってるのか・・・こいつは
いつも無理しやがって・・・

その時、呪文を唱えているルイズにゴーレムの手が襲いかかってきた。

まるでアリでも踏むかのような躊躇しないそぶりで・・・

「ルイズッ!!」

サイトは叫んでルイズを抱きかかえる。

その瞬間ゴーレムの手が斧の様に振り下ろされ視界は閉ざされた。
砂煙が走り土がひび割れていた。

「ふうー、大丈夫か？ルイズ」

ゆっくりとルイズをおろす。

「何で助けたのよ！私一人でもッ

」

パシンッ

「えっ

「バカか！死んだら何にもならねえじゃねえかよ！」

「サイトが怒鳴るとルイズの瞳が潤みだした。

「だ、だって、いつもいつも、ゼロ、ゼロって、バカに、されて

」

途切れ途切れにルイズの口から紡ぎだされる消え入りそうな声にサイトは驚いた。

「な、何も泣くことは・・・」

「な、泣いてないわよ。ばかぁ」

泣いてるじゃん、と突っ込みたかったがこのシリアスな場面にそれはそぐわないだろうと次回に持ち越す。

しんみりとした空気が流れているところに無粋なゴーレムの手が落ちてきた。

「サイトはルイズをだき抱えて後ろに飛んだ。

「ったく、ちよつとはしんみりさせるつての！」

そこへ、タバサの使い魔シルフィードが来た。

「早く乗って」

「タバサにしては珍しく焦った声で叫ぶ。

「ルイズを抱えてシルフィードに乗せる。

「あなたも」

「俺は良い。行ってくれ」

「えっ、ちよつと。ダーリン！」

ゴーレムが近づいていたのでもう間に合わないと判断したのかタバサはシルフィードを飛翔させた。自分に迫ってくるゴーレムにキュルケからもらった剣で立ち向かう。

「うおおおおりやあああ！！！」

妙な声をあげて剣を振り下ろす。

結果は分かっていたので別に驚かない。

そう、折れたのだ。

「何よ。かの有名な錬金術師が鍛えたんじゃないの？」

ゴーレムの頭上でルイズたちは口々に言い合う。

が、サイトにはどうでもよかった。

このままよけ続けていれば・・・

「サイトッ！」

ルイズが『レビテーション』をかけてもらいながら降りてきた。

「ルイズッ！お前どうして」

と言いつつルイズの持つてる物に目を向ける。

「ルイズ！それ貸せ！」

半ば強引に『破壊の杖』を奪う。

「伏せろ！」

ルイズが伏せたのを確認すると発射スイッチを押した。

ドゥオオオオオオン！

馬鹿デカイゴーレムに着弾し土くれに変わる。

「大丈夫か？ルイズ」

破壊の杖を地面に置きしゃがんだままのルイズに手を伸ばす。

「あ、ありがと。でも、その杖は？」

「ああ、あの杖は」

いつの間にかミス・ロングビルが戻ってきてきてサイトの置いた『破壊の杖』を拾っていた。

キュルケが尋ねる。

「今までどこにいらしたのです」

か？と言いつつ終わる前にミス・ロングビルが破壊の杖をルイズたちに向けた。

「ミス？一体何を」

ルイズがもつともなことを尋ねる。

「ありがと。使い魔君。おかげで『破壊の杖』の使い方が分かりました」

そう言うとサイトがやったように『破壊の杖』を肩にかけボタンに指を置く。

「っ！まさかあなたが」

「そう。『土くれ』のフーケ」

3人から驚きが伝わる。

「さあ。あなたたちは杖を捨てなさい！ああ、使い魔君は武器を

持つとすばしっこくなるそうだからその折れた剣を捨てなさい！」
ルイズたちは渋々といった様子で杖を投げ捨てる。
サイトも素直に剣を投げ捨てる。

「いろいろとありがとう」

3人は目を瞑ったがサイトだけは目をつぶらなかつた。

「あら？あなた、勇気あるのね？」

「いや、勇気じゃないさ」

「?・・・まあいいわ。ここでおさらばね。楽しかったわ。じゃあ、さようなら」

言い終わった瞬間発射スイッチを押す。

カシヤツという音が聞こえる

「えっ？」

何回押してもカシヤツ、カシヤツという音しか聞こえない。

「ちっ、ならいいわ。ゴーレムで踏みつぶし　　ッ!？」

フーケの手から杖が落ちた。

サイトがエアガンでフーケの手に当てたのだった。

突然の攻撃にフーケは目をみはった。

「観念しろ! 『土くれ』のフーケ」

サイトは敢えてフーケを気絶させなかつた。

持ってきていたガムテープで縛るだけにした。

「『土くれ』のフーケを倒して『破壊の杖』を取り戻したぜ！」
その瞬間、少女たちの歓声であたりは騒がしくなった。

「じゃあ、帰るわよ！」
というルイズの一言で馬車へ戻る。

「あつ、悪い。タバサ、お前のシルフィードで帰っちゃダメか？こいつもいることだし・・・」
ガムテープに縛られうめくフーケを見せる。

「別に、いい」
肯定の意を示した。

という訳でサイトとタバサ、デルフリンガーは使い魔シルフィードで帰ることになった。

いくら風韻竜といえど学院までは数時間はかかる。

その間に信頼できる人間にある程度の情報を与え頼れる味方を得ておこうという訳だ。

本当はだめなことかもしれない。

だが、駄目だと分かっているでもそれで幸せになれる人がいるのだとしたら

俺は、それに逆らう。

そう思いサイトは頼んだのだ。

「どうして？」

シルフィードの背に乗り学院から帰っている時に聞かれた。

おそらく、『どうして』ルイズたちと帰らなかったかということだろう。

「ちょっと、タバサに話しておきたいことがあってな」

「なに？」

「まあ、その前に、と」

ベリツとフーケの声の自由を奪っているガムテープを一気にはがした。

その瞬間

「痛いっ！何すんのよ!？」

「落ち着けよ」

「これが落ち着いてられるもんですか！ホント、痛かったんだから」

数時間前までオスマン学院長の有能な秘書として働いていた女性とは思えない表情と口調でサイトを怒鳴りつけた。

その顔は、今までのミス・ロングビルとは違いオーク鬼に近かった。

「それで、話」

「ああ、そうそう。話、話ね」

そう言う自分の持ちうる情報を話し始めた。

タバサの事、ガリア王の事、タバサの母親の事・・・その他諸々どれも核心と呼べるものは話さなかったがある程度の事は話した。もちろん、自分が一回死んだことも話さなかった。

あくまでも、予想　　に似たようなものということで話した。

「本当なの？それ」

フリーケが驚きの眼差しでタバサを見る。

「本当」

タバサの母親が心を取り戻す。という話が嬉しかったのかタバサは心なしか喜んでるように見えた。

「でも、その話が本当かどうかは信用できない」

「ん〜じゃあ・・・」

と言って、自分の愛用する剣に目を向ける。

「デルフ。お前、気づいてるんだろ？」

「何がでえ？」

「この竜のことだ」

そう、風韻竜シルフィード

本名はイルククウ。

前は自分もデルフリンガーに言われるまで分からなかった。

「俺たちの前だったらしゃべっていいぞ」

まさに、今自分の乗ってる竜に向かってしゃべり始めた。

タバサは目を見張ってサイトを見フリーケは

「何言ってるの？あんだ、頭は大丈夫？」

異常なものを見るような目つきでサイトを見る。

「風韻竜。イルククウ！」

尚もしゃべらない竜に名前と種族を叫ぶ。

「・・・相棒。気づいてたのか？」

「まあな。このくらい当然だろ？」
サイトが言い終わった瞬間

「きゅいきゅい。ばれちゃったのね。でもどーしてわかったのね？」
竜がしゃべり出した。

その瞬間フーケは気絶して倒れてしまった。

竜の上だったのでサイトが咄嗟に支えて事なきを得たが・・・

「分かった。あなたに協力する。でも、どうして？」

「さあね？どうしてだろうな？」

これ以上タバサは追及しなかった

しても無駄だと思ったのだ。

それはおそらく自分たちには言えないことだろうと思った。

「きゅいきゅい。まあいいのね。久しぶりにお姉さま以外の人と話せるからうれしいのね」

こうして3人（うち1人氣絶）と1振りの剣と一匹の竜は楽しく、
とまではいかないが会話をした。

このときタバサは珍しく学院に帰るまで自分の唯一のである読書を
しなかった。

しかし、それなりに楽しそうだったという・・・

第15章 捕獲と協定（後書き）

お読みくださり誠にありがとうございます。
心より感謝申し上げますと共にこれからもお付き合いください
ようようお願い申し上げます。

第16章 密約と成約

ルイズたちが学院に帰るとそこはもうお祭り騒ぎであった。特に、今まで自分を馬鹿にしていた生徒たちも手のひらを返したように

「すごいな！ルイズ！俺はやると思ってたぜ！」
とか・・・

「よくやった！俺たち友達だよな？ルイズ！」

などなど普通に労う声に混じってこんな声も多く聞こえていた。

貴族の名誉ではあるのだが、ルイズは複雑な気持ちで聞いていた・

（もうっ・・・ホントは全部サイトがやったのに・・・）

そんな、思いが顔に出ていたのか同じ馬車に乗ってきたキュルケが声をかけた。

ちなみに魔法で馬車を操ってきたのも彼女だ・・・

「良いじゃない。ヴァリエール。確かに、倒したのはダーリンだけど私たち討伐隊に志願したんだし」

彼女の場合その性格も幸いしてかあまり気にはしてないようだった。

『使い魔の手柄はご主人さまの手柄・・・』

そう思い、割り切ろうとしてもそこはやはり・・・というかもやもやしたものがルイズの心の中に渦巻いてた・・・

そんな群衆の中真の功労者であるサイトと無口なトライアングルメイジの姿を見つけた。

二人に近づいて尋ねた。

「フーケは・・・？」

「オスマン学院長に渡して、衛兵に渡した・・・だよな？タバサ」
サイトが相槌を求めると隣のタバサもコクコクと小刻みにうなずいた。

メイジでありトライアングルであるタバサは信用できる。

そりゃあ、あの忌々しいツエルプストーの友人で『タバサ』という苗字も偽名のおいブンブンなのだが一緒に学んできた級友なのである。

信じるに足る人物というのはルイズも重々承知していた。

それに、とサイトに目をやる。

異世界から来た使い魔に手柄を横取りする度胸も器量もあるとは思えない。

それはリスクが多い、とその可能性を淘汰する。

程無くしてルイズたち『土くれ』のフーケ討伐隊は学院長室に呼ばれた。

「なんですか？オールド・オスマン」

そうルイズが尋ねると自慢のひげをいじくりながら老齢の魔法使いは答えた。

「まあ、あわてなさんな。そうじゃの、今回の功績を見て王室に諸君らの『シユヴァリエ』の授与を申請しておいた。

後々、授与されるじやる。ミス・タバサは、すでにもっとるので精霊勲章の授与を申請しておいた」

オスマン学院長がそう言い終わると3人の少女たちの顔がぱっと輝

いた。

「では、これで」

と言って出て行くこうとする2人の少女とは違いどうしても疑問をぶつけたい衝動にルイズは駆られた。

「どうして、どうしてサイトには何もありませんか!?!」

真剣な目をして尋ねるルイズの目からは学院長は目を合わせず答える。

「その・・・彼は平民じゃ・・・」

しかし、そのあとの言葉はいらなかったようだ。

「俺は何も要りませんよ」

「才人!」

何と後ろにサイトが立っていたのだ。

みんなが驚いた様子にすまなそうに謝る。

「すみません。ノックしたんですけど返事がなくて・・・」

「そうかね?それならば・・・それで・・・」

尚も不満そうなルイズにオスマン学院長は違う話題を振る。

「今宵は『フリッグの舞踏会』じゃ。今夜の主演は君たちだ。十分に着飾りなさい」

そう言つと、キュルケは、はっとしたように

「そうですね。フーケの騒ぎで忘れておりましたわ」

そう言つて、あまり興味を示さないタバサを引っ張り無理やり連れて行つた。

「ルイズもおしゃれして来いよ！」
しびしび、と言った様子のルイズを理由につけて退出させた。
もつとも、納得した様子はなかったが……

今、この空間にいるのはトリスティン魔法学院院长オールド・オスマンと異世界出身の伝説の使い魔ガンダールヴこと平賀才人のみである。

実は、フーケ討伐の前に二人の間には密約が交わされていた。

何とそれは、フーケの身柄をこの学院内におく……という思い切ったことだった。

当然のことながら王室には今回の事件は全くと言っていいほど報告していない。

生徒にも教師にも内部のみにとどめるように言って有る。

もちろんフーケの杖はサイトが持っている。

「これで、良かったのかな」

「ええ、ありがとうございます」

オスマン学院長にはタバサ以上に情報を与えている。

もちろんタバサ同様に聡明故に話せなかったこともあり核心部分はそれほど話してはいないが……

協力者としてはこの上もなく心強い人だ。

「君がガンダールヴだというのならワシは君の力になるう。この、『破壊の杖』に誓って……」

そう言うとサイトが取り返してきた『破壊の杖』改め『M72ロケットランチャー』に目を落とす。

「これからも、よろしくお願いします」

そう言ってサイトは学院長室を出た。

去り際に「今日は舞踏会じゃ。ナンパに励め。青少年」と言われたのは聞かなかったことにしておく。

こうしてまたサイトは歴史に逆らいながら一步を踏み出していった。狂った歯車がどのような結果をもたらすかは今はまだ、誰にも分からないのだった……

第17章 フリッグの舞踏会

フリッグの舞踏会・・・学院の男子生徒が我先にと可愛い女生徒を誘い優雅に踊っている。

伯爵貴族だったサイトから見ればまだまだお遊戯レベルにしか見えないが、それでも懸命にエスコートしようという振る舞いだけは、さすが貴族のそれ、と言えた。

サイトは、と言うと優雅なダンスに背を向けデルフリンガーを立て掛けおしゃべりをしていた。
なんだかむず痒くなったのだ。

こう、思春期における特有のオーラのようなものが充満した会場は幾分精神年齢が上なサイトにとっては苦笑この上ない。
そう言う訳であえて華やかなダンスホールに背を向け光の当たらないところでワイン片手に外を見つめているのだった。

「なんだ？相棒。おどらねーのか？」

デルフが至極もつともなことを聞くのだが・・・。
確かに派手なドレスに身を包みおめかしをしたキュルケから誘われたりもした。

黒いパーティードレスを着け喜々としてハシバミ草を召し上がるタバサもいいな、とは思ったが踊ろうという気は起きない。

と言うよりは誘われるのを待ってるのだ。

自分の可愛いご主人さまから・・・

なのでデルフへの返答は

「先客が入ってるんだよ。だから、いまは踊らない」
その眼は真剣に・・・それでいて懐かしむように穏やかな眼をして
いた

月夜の晩

双月の照らすハルケギニアの地を眺めるのが好きだったサイトはそ
れを肴にワインをあおる。
といっても彼が飲める量などは限られている。

「なあ、デルフ」

伝説の剣に話しかける。

「なんだ？相棒」

伝説の使い魔に答える。

「月が・・・綺麗だな」

「・・・？酔ってやがんのか？」

それ以上サイトは何も答えなかった

それからしばらくして遠くの方からルイズの名前が呼ばれた。
ご令嬢の登場と言う訳だ。

「すごいね。相棒。あの娘っ子。選り取りみどりじゃねえか」

「ああ、そうだな」

「・・・どうしたんだ？さっきから」

「別に、何でもねえよ」

サイトはずっと考えていた。

自分が生まれ変わることができた理由

そんなことは考えとところで答えなど出るはずもない。

大事なのはどう進んでいくか、だ。

実際、自分が今やっていることが正しいのかどうかも分からない。

つまりは、サイトの脳の限界を超えてなお複雑怪奇なことを考えていたためにボクっとしていているように見えただけだ。

「サイト！」

その声にハッと我に帰る。

いつの間にかルイズが目の前に来ていた。

「どうしたのよ？さっきから読んでるのに返事もしないなんて使い魔失格よ？」

よく似合ったきれいなドレスを身にまとわせたルイズはいつもとは違う雰囲気を漂わせていた。

「・・・別に」

綺麗だよ、とか美しいね、と言うのも癪だしもうそんな事は言い飽きた、と言うよりは言いなれた言葉を

吐く次期ではないので敢えて胸にしまいそっけない態度をとる。

ルイズは頬朱に染めながら

「踊って上げてても良くてよ？」

そういつてルイズは手を差し出した。

小さな手
華奢な腕・・・

だが、すぐにはその手を取らなかった。

「踊って下さいじゃねえのかよ？」
眼をそらしながら言う。

確か、前にもこんなことがあった気がする

ルイズはふう、と小さくため息をつき

「私と一曲踊って下さいませんか？ジェントルマン」
ドレスのすそを両手で持ち上げた。

まるで、目上の人を相手にするように恭しく手を差し出した。

その姿は確かに気品を持ち合わせていた。

今度は素直にサイトも手を取れた。

ダンスホールで優雅に踊る二人の姿があった。

二人だけの世界が確かにそこにはあった。

まるで、そこにだけ光があるように周りで踊っていた生徒たちも一
斉に二人に注目し始めた。

「なんだ？あいつ。平民なのにあの踊り・・・」
「すぐくうまいじゃないか」

などとささやかれているが二人だけの世界に入ってしまったルイズ
とサイトは気にも留めず踊り続けた。

なんといつてもサイトは仮にも伯爵だった男だ。
確かに堅苦しい行事は好きではなかったがルイズを教師に貴族とは
何たるかをたたきこまれたのだ。
そんじよそこらの貴族のお坊ちゃんたちとは格が違う。
もちろん、その中にはダンスも含まれていた。

「なによ、あんた。うまいじゃない」
軽やかにステップを踏みながらサイトを褒める。
「べ、別に・・・大したことねえよ」
照れながらもしっかりとエスコートをする。

下手な振りをしようとも思ったが長くしみついた習慣などはなかなか
か抜けない。

それは生まれ変わったサイトにも言えることだった。

「あのね、信じてあげるわ」

ルイズが驚きとも喜びともつかない口調で言った。

「何を？」

「あんたが別の世界から来たってこと」

「何だよ。信じてなかったのか？」

サイトも別段憤慨した様子もなく返す。

「あんなの見ちゃったら信じるしかないじゃない」
「そうかよ」

だんだんと曲が速くなってきた。
踊ることも難しい曲を二人は難なく踊り続けた。
ルイズはいくら公爵家息女とはいっても16歳くらいの女の子だ。
息を切らせつつも踊れているのはまぎれもなくサイトのおかげだろ
う。

幻想に包まれた二人を見ながらデルフはつぶやく

「おどれーた！大したもんだ。相棒」

優雅な踊りを見ながら続ける。

「主人のダンスの相手を務める使い魔なんて、初めてみたぜ！」

幾千もの時を傍観してきた剣

デルフリンガーは今代のガンダールヴに秘められた力を感じていた。

幻想的な双月が

優雅に踊る二人を祝福してくれているようだった・・・

第18章 密談

やがてダンスが終わりあんなにうるさかったホールも静けさを取り戻していた。

そんな、ところに一人動く者がいた。

サイトであった。

彼がなにをしているのかと言うと生徒たちの残した食事などを集めていた。

残り物とはいってもほとんど手のつけられていないものもあったし終わってすぐ来たので状態も悪くない。

既にルイズは部屋にいつてすぐに寝てしまった。

なので、部屋から抜け出すのも簡単だった。

そんな彼がなにゆえ食糧をかき集めているのかと言うと・・・

ここは、学院のとある一室

部屋は家具こそ少ないがきちんと掃除もなされていたのか人が住むには十分な環境だ。

そんなところに『土くれ』ことフーケがいた。

「まったく。何だつてあたしがこんなところに」

文句を言いつつも何故ここにいるのかは自分でも分からない。

杖がないからか？

住みよい環境だからか？

いずれも当てはまらない気がする。

と言つよりもそれらはこじつけた理由にすぎないというのはフーケ自身分かつていた。

分かつてはいるのだがうまく言葉にすることができない。

敢えて無理やり表現してみると“興味が湧いた”と言つところだろうか？

まるで、貴族連中が隠し持っている財宝のありかを探るときのように……

好奇心なのだろうか？

いや、それだけじゃない気がする。その一言で片づけてしまつにはあまりにも単純すぎる。

いずれにしても自分にそんな“人間臭い”ものが眠っていたことに口元がほころぶ。

同時に考えるのが億劫に感じられた。

「あゝ！ヤメヤメツ！めんどくさいったらないわ」

ごろんつと若い娘らしからずベッドに寝転がる。

ベッドに寝転がってはみたものの先ほどまで眠っていたので眠気は一向に来る気配がない。

かといってこの部屋には気の利いたものがないので一度は止めた思考を再度張り巡らせてみる。

ただの作り話にしては……出来すぎよね？

でも、あいつの話はありえないことじゃない。

アルビオン反乱の話はあまり明るくないが治安が悪く貴族の反乱がおきていることくらいは知ってる。

あの忌々しいアルビオン王家が倒れようとしていることも・・・

「って、思い出さたくないことまで思い出しちゃったわね・・・」
いつになく感傷的になる。

これほど、弱い自分はいつ以来だろうか

少女が少女ではなくなっただとき？

それよりもつと前？後？

どちらにしても弱い部分を出してはいけない。人前では尚更だ

次に思い浮かんだのはウエストウッド村で自分を慕ってくれている子供達のことだった。

自分が盗賊をしていて捕まったなどどうして言えよう。

思えばあの子たちがいたからこそ自分を失わずに居られたのではないか？

あの子たちの笑顔があったからこそ今までだって・・・

不意に自分がやってきたことを正当化しようとしていることに気づく
自分ももう、戻れない。いかに汚く醜いことをしていたのか
盗賊の美学などかつこつけて・・・わざと濁して・・・気づきに
くく・・・

いや、本当は気づいていたのかもしれない。

こんなのは復讐でも何でもないことに・・・

いつの間にか自分の目から温かいものがあふれていることに気づい

た。

自分の髪にそれが触れ濡れ湿る。

だが、今はただただ泣きたかった。

声を殺して目からあふれ出るものをそのままに……

数分後だろうか数十分だろうか？

感情が落ち着いたころ涙をゆっくり拭き終わったときこの部屋の扉をノックする者がいた。

まぶたは腫れているかもしれないがそれもどうでもよかった。

ふらふらとドアを開けると自分のゴーレムを一瞬で倒した平民だった。

「え、と、シツレイシマス……」

なんとなくサイトはルイズが寝ている時に異性の……しかも、年上の部屋に入るのは後ろめたく思った。

何と言うか妙な緊張感がある。

「何、緊張してんのよ？」

フリーケは苦笑したようだった。

「べ、別に……ほら、食べ物」

サイトが差し出したのは貴族が食べている上等な食事と上級貴族が飲むような高級ワインだった。

あらゆる贅沢品を口にしてきたフリーケもこれには驚いた。

「どうしたのよ。これ」

「どうしたって・・・あまりものだしワインだってもらいものだけ」
サイトはこともなげに言う。

「フーケもフーケでもらいものなら、と言うことで遠慮なく食べ始めた。」

沈黙が支配する食卓だったが実に心地よい雰囲気だったと思う。
やがて、食べ終わったフーケがサイトに尋ねる。

「ねえ、なんで私を衛兵に突き出さなかったの？」

「フーケからしてみれば至極もつともなことである。」

「なんでってそりゃ悲しむ人がいるからに決まってるだろ」

「はい？」

自分を捕まえて喜ぶ人はたくさんいるが悲しむ人はいないと思う。

仮にも盗賊

特に貴族たちにとっては百万歳だろう。

そんな自分がかまって悲しむ人がいる？

そんなはずはないと思う。

「一体誰が悲しむってのよ？そりゃ、喜ぶの間違い」

「フーケの言葉を遮って言った。」

「少なくとも俺は寂しくなるし・・・それに、アンタが守ってきた
子供達も悲しむと思うよ」

「馬鹿言うんじゃないよ。第一・・・ッ！」

今この少年は子供達と言った。

まさか、そんなことまで・・・？

そんなフーケの様子を見たのか核心を突く一言を言った。

「ウエストウッド村のことだよ。マチルダ・オブ・サウスゴードさ

ん
そのことでフーケは確信した。
この少年はすべてを知っている、と

「どうして？と言つのは今は聞かないでくれ・・・おっと、そうそ
う」

啞然としたフーケにかまわずサイトは懐から何かを取り出そうとする。

それは、さらにフーケを驚かせるものだった。

「これ、返しとくわ・・・と、これやる」

何と彼が取り出したのはフーケの杖とどっさり和金貨の入った袋だった。

しかも、見ればすべてエキュー金貨であった。

金貨はともかく杖まで返すとはどういうことだろう？
思えばこの少年最初からおかしかった。

この部屋だって仮にも囚人を入れる部屋とは大抵思えない。

カギだつてかかつてなかったし何より見張りも立てないというのは
どう考えても不自然すぎる。

ならば、なぜ？

なのに彼の答えと言えは

「いやあ、杖返すの忘れてた」

フーケをずっこけさせるには十分すぎるものだった。

「ちよ、ちよっと！なんなのよ、それは」

「いや、悪かったつて。本当に！マジで！絶対！」
見当違いなことが返ってくる。

「じゃなくて！どうして返してくれるのかって聞いているの！」

またしても返ってくる答えは

「だって俺。杖要らないし」

まるで当然と言わんばかりの答えだった・・・

(もう、何も言うまい)

そう心に決めたフーケであった。

とは言うものの金貨の事は聞かざるを得なかった。

「・・・で、この金貨は？」

「あ、そうそう。それね、それ、村に渡してきて」

村・・・と言うのはウエストウッド村の事を言っているのだろう。

何故、彼がここまでするのかは分からなかったがこの金貨はありがたく頂戴しておくことにした。

これだけでもしばらくは暮らせる額だ。

何より無一文の自分にはありがたい。

「でも、この金。いったいどうしたのよ？」

「あつ、それは」

この金貨の山を生み出したのか？

それは、キュルケに買ってもらった剣のおかげだった・・・

あの剣、折れはしたもののそのまわりを彩るきらびやかな装飾は本物だったらしくかなりの高値で好事家に売れた。

どうやら、貴族と言うのはつくづく豪華にしないと気が済まない性質^チらしかった。

と言うことを一通り話し終えたサイトにフーケは納得したような顔を示した。

「でも、私がどうするのよ？そのまま、雲隠れするかも知れないわよっ。」

「そ、それは……まあ、そうかもしれないな」

「でしょ？だから……」

「でもさ、戻ってくると思ってるよ。俺は」

「なっ
」

この平民はなぜここまで他人を信じられるのだろう？

ましてや自分は盗賊でありさらに、こいつらを殺そうとした人間なのに……

それを何故ここまで……？

「言っとくけど、これは偽善だから」

「はい？」

ますます訳が分からない。

しかも、自分から偽善と言う人など聞いたこともなかった。

「俺が、見たくないもの、したくないことをしないようにするため
の……」

キョトン、としたフーケに気がついたのか

「何でもない。それと、俺の名前は出さないでくれ」

「……？どうして？」

「訳はいずれ話す、だから……」

納得いかず、というような顔をしたが仕方がないので悪いとは思いつつも

押し通した。

「んじゃ、帰るよ」

「っそ。早く帰りなさい」

結局、小一時間ほど話し合いを行ったので終わったのは夜も深まった頃だった。

なかなか有益な話し合いができたと自己満足するサイトは勇み足で部屋に帰った。

夜空には、微笑み合うように二つの月が燦然と輝いていた・・・

第19章 行幸

翌日、前の世界に・・・あるいは本能に忠実に従ったサイトは、ポツコポコにされて人々の目に晒された。

あらゆることに忠実に従った自分を褒めたやりたいのと激しく後悔している感情が入り混じり自分がみじめに思えた。

いや、本当は悩みに悩んだ末の行動だった。

おそらく、51%がYES。残り49%がNOだっただろう。

激しい葛藤の末の行動だった。

サイトがポツコポコにされてしまったのは昨日フーケの元から帰った後デルフリンガーのよいしょもあり

その、大っぴらにできないというか・・・まあ、いわゆる“ベッドに忍び込んだ”と言うやつである。

そんなわけで、只今“犬”と化し首輪まで付けられたサイトはルイズにしょっぱかれながら食堂、教室を散歩しているのである。

生徒たちが好奇の目でサイトを見たり時には憐れむようなときには鼻で笑ったりしていた。

サイトとしては屈辱極まりなかったが自分も相当アレだったので強くは出れないのだ。

従って朝から

「わん、わん、わおおん」

犬の鳴き声しか発していなかった。

「全く、この使い魔と来たら発情することしか頭にないわけ？」
サイトの頭を靴で踏みつけながら手に持ったリードを引っ張る。

はたから見ていると非人道的極まりないがこれはこれで・・・と思う者もいたという。

生徒たちも

「こいつ本当にギ シュを倒しフーケを捕まえたのかよ?」
とか

「こいつだったら俺でも倒せるんじゃない・・・」
などと囁き合っていた。

そんな、声や視線にようやく気付いたのかルイズは頬を染めながら
「き、今日のしつけはここまでね」

やっと、首輪から解放されたサイトは首が正常に動くかどうか確かめながらルイズの後に続いて教室へと入っていた。

その時間の授業はミスタ・ギターによる風の授業だった。

よほど腕に覚えがあると見えキュルケの火球を弾き飛ばして見せた。さらに、呪文を披露しようとした所でミスタ・コルベールがバンと勢いよく扉をあけ入ってきた。

「皆さん！大変ですぞー！」

そのいでたちはみょうちきりんな格好にかつらをかぶっていた。

ポーズをとった瞬間つるつとずり落ち滅多に口を開かないタバサの

「滑りやすい」

という一言で教室中の笑いものとなってしまったが・・・

顔を真っ赤にしてどなり散らすコルベールをあざけ笑うがごとくますます教室は騒がしくなった。

ようやく騒ぎが鎮静化してきたところでギトーがコルベールに聞いた。

「それで・・・ぷぷっ・・・大変・・・くっ・・・な事とは？」
笑いをこらえていると見えところどころ笑い声が混じっていた。

そんな同僚に殺意を覚えつつも気を取り直して先ほど知らされた大事を報告する。

「おそれ多くもトリステイン王国王女、トリステインに咲く一輪の可憐な花・・・アンリエッタ王女殿下がここトリステイン魔法学院を行幸なされるとのことです」

その報告に教室中が驚きと歓声に包まれたと同時にサイトの顔に険しいものが表れた。

「いよいよ、か」

これから起こる出来事が脳内で忠実に再現されていた。

あの裏切りと憎しみ、悲しみに包まれたアルビオンをサイトは忘れてはいなかった。

「つきまして、皆さんは？」

まだ、コルベールの話が続いてみた。

ふと、ルイズの方を見てみるとそこはやはり、と言うかどうかとも考え事をしているようでポーっとしていた。

何を考えているのかは見当がついた。

とても、今は話しかけても答えてはくれなさそうだった。
無理もない。

なぜなら、彼女は孤独な姫の友人なのだから・・・

時同じくして魔法学院に続く街道をゆく立派な品格を讃えた馬車が
あった。

かくも見事な金の冠、随所に見られる金と銀とプラチナでできたレ
リーフが王家所有のものであることを示していた。

厳格な中にも美しさを兼ね備えたユニコーンは王女が乗っているこ
とを象徴していた。

トリステインの姫君、アンリエッタ・ド・トリステインは窓に目を
やりながら憂鬱な面持ちでため息をついていた。

王女の正面には激務に身をやつし痩せてしまった宰相、マザリーニ
が険しい表情で座っていた。

正直、このあれこれと言われ気が滅入っているのだ。

「殿下。何度も言う様ですが

」

アンリエッタは『鳥の骨』と揶揄されている宰相の言葉に多少苛立ちを覚えた。

「分かっておりますわ。そう、分かっています……」
「ならば、もう少し王女としての振る舞いを……」

これまで、場所の中で幾度も繰り返された会話だった。
いや、会話と言うにはあまりにも欠けすぎたものだった。

そう、これは説教なのだ。

我慢していればいつかは通り過ぎるもの。
今は、我慢さえすればよいのだ……

これまで幾度もやってきたようにただただ宰相の“説教”に耳を傾ける。

後は感情を殺し相槌さえ打っておけばいいのだ。

そんなアンリエッタの様子に気づいたのか

「聞いておられますか？ 殿下！」

やや語尾を強め憚然とした口調で尋ねる。

そんな、マザニエリの強い口調にアンリエッタは驚いた。

（何も馬車に乗っている時まで『王女』である必要は無いと思うのに）

そんな、王女あるまじきことを思いながらも目の前の宰相には王女たる返答とする。

「もちろんですわ。私は、王女ですもの」
順々に、それでいて皮肉っぽく返す。

そんな、王女の態度にため息をつきカーテンの向こうにいる部下を

呼ぶ。

「お呼びでございますか？ 猊下」

この部下こそトリスティンが誇るグリフォン隊隊長ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド

二つ名の『閃光』を掲げし名門貴族だった。

たくましい口髭と鷹のような眼をもった者だとアンリエッタは思う。

マザリーニの命に従い子爵は花を摘む。

アンリエッタは自らの手でそれを受取る。

恭しくも花を手に取り会話を交わしたのち子爵はまた馬車から離れていった。

そうして、

学院までの退屈な時間を紛らわせていた・・・

第20章

苦悩の始まり祝杯の軌跡（前書き）

第20章 苦悩の始まり祝杯の軌跡

それから、サイトの歴史に刻まれていた様にワルド子爵を携えてここトリストイン魔法学院に行幸された。

その内容も所要時間もサイトの経験したものとあまり変わっていなかったと思う。

が、知っている情報が違う。

未だ、アンリエッタを含める王宮の者たちは『土くれ』のフーケを3人の生徒と平民1人が捕まえたことを知らないはずだ。

もつとも、生徒や事情を預かり知らぬ教師たちが漏らした可能性は否定できないが・・・

そんなサイトの懸念は無用だった。

その後の舞踏会のおかげで学院の過半数は記憶からぬけているのだった。

今、サイトの目に学院の生徒に麗しく手を振るアンリエッタとその後ろで威厳と尊厳を漂わせたワルドが佇んでいる。

サイトは今までに幾度も考えてきた。

ワルドだってはじめから裏切ろうとしていたのでは無いのではないかと

そうでなければルイズが今、頬を染めたりするはずがない。

最初はきつと信頼するに足る器の持ち主だったのではないか？

それが、何かの理由で・・・

そう願わずにはいられなかった。

そうでなければ悲しすぎるから・・・

そこで、一旦考えるのをやめたサイトはまわりの喧騒に身を任せてみる。

隣を見てみると依然、頬を優しい桃色に染めているルイズが・・・また隣を見てみるとぼーっとした目で本を読みあさるタバサとワルドにご執心となりつつあるキュルケが・・・

そんなことを思っているといつの間にか後ろにいたギ シュがサイトに声をかけた。

「さつきから君は何を言ってるんだね？」

自分では声に出したつもりはなかったが気づかぬうちに声に出していたらしい。

なんとも恥ずかしい

「い、いや。別に。あの貴族。強そうだなあと思ってさ」

そう言つとギ シュは驚いたように言った。

「君は、“あの”ワルド子爵を知らないのかね！？彼は、貴族の中でもエリート中のエリートの〜」

ワルド子爵の説明を始めたのでそのまま聞き流す。

サイトだってそんなことは百も承知だ。

そのうち、ワルドのグリフォンとワルドに注意されたギ シュが肩を落としたのち鼻の下をのびしながら

懲りずに王女をトロンとした眼で見続け始めた。

しばらくしてパレードは幕を閉じた。

その後、いわゆる“ヘン”になったルイズを置いてサイトは別の塔に向かった。

アンリエツタ王女殿下がルイズを訪ねてくるのはどうせ夜だし、という経験を信じサイトはフーケのところを訪れる。

一応、フーケが発つのはサイトがOKを出してから、と言っている。だから、フーケが今部屋にいるのは確かだった。

コン、コン、コ、ゴン！

これは、サイトとフーケの間で取り決めたノックだった。

誰も来はしないが念には念をとというフーケの元盗賊らしい提案あったことだった。

なるほど、独特のノック音

これなら、偶然あるものではない。

と言う訳でドアを開けてもらったサイトはフーケに頼んでおいたものを受取る。

「ほら、ちゃんと『固定化』をかけたいたよ」

フーケが出したのはサイトの持ってきた武器や道具だった。

どうしても道具と言うのは時が経てば劣化してしまうものだがこちらの世界には『固定化』という

便利なものがある。

活用させてもらわない手はない、という訳だ。

「そりゃどうも・・・んじゃあ悪いがこれも明日の朝までに・・・」
フーケの顔が引きつる。

それも当然。何しろ魔法というものは体力・精神力を使う。

いかにトライアングルクラスといえど疲労は変わらない。

「ちよ、ちよつと！こりゃ、いくらなんでも・・・」
「そうか？今日は、肉とワインをつけてやるうと思っただのになあ・・・
・そうか、やってくれないのか。仕方ない」

実は、これまでの食事でサイトは自分で持ってきた缶詰

『国産焼肉！！最高級牛太郎！』

なる缶詰をワインと一緒に出してみたところ見事にフーケの下にホ
ームランし

それ以来13ばかり持ってきた缶詰3つをフーケに与えていた。

「・・・む、やるじゃないか？このあたしを強請ろうなんて
「別に？やってくれなくてもいいんだぞ？他の奴に頼むから」

『他の奴に頼むから』という件は、^{くだり}ハツタリだった。

他の奴に頼んだとしても見たことのない道具にわざわざ神から賜り
し魔法を平民のためにかけてやるうなどと思う

酔狂な貴族はいないに等しい。

オールド・オスマンにしてもこれ以上面倒をかけるのは正直気が引
ける。

故にフーケに頼むしかないのであった。

(いや、無理やりギ シュにやらせてみたけどあいつ『ドット』だ
し、キザだし)

要するにザコと言う訳だ。

「しっかたないねえ！サービスしなよ？ちゃんと間に合わせて見せ
るから」

「悪いな。その代り、今まで食ったことないようなうまいもの食わせてやるから」

「せいぜい期待してるよ」

そう言つて二人は笑つた。

そして、サイトは思いついたことを聞いてみる。

「もしさあ、もしだぞ？『ウェールズ皇太子を殴れたら』どうする？」

サイトは自分の持つてきたワインをあおりながら聞いた。

フーケはこれもサイトの冗談だろうと思いつつ真面目に返してみる。

「そりゃ、最高だろうけどねえ。最もあたしとしてはジエームズ一世の方を殴りたいけどありゃ歳だからねえ」

「じゃあ、殴れたらもう一度『マチルダ』の名前を使う気ないか？そりゃ『フーケ』もいいけどさ」

「うん、それもいいかも知れないねえ。一度は捨てた名を使う、か。なかなかロマンチックじゃないか」

フーケは、グラス注がれた赤い液体に視線を落としながら呟く。

「じゃあ、俺がそれ。実現させてやるよ」

ギョツとしてサイトの顔を見る。

相手は王族。平民・・・しかも、元盗賊に殴れるはずがない。

それを、この平民は真剣な目で言っているのだ。驚かないはずがなかった。

「ふうん？そうかい」

冗談だ。と思つていてもこの平民の言動には無視できないものがある。

もしかしたら？という気持ちとありえない！という気持ちとが呻きせめぎ混ざり合う。

できるかも知れない、不思議とそんな気にさせてくれる。

そんな、嘘偽りのないまっすぐな一言だった。

「じゃあ、『マチルダ』と『王族殴り』に」
サイトがグラスを掲げる。

それに従いフーケのグラスも上がる。

サイトとフーケが同時に声を発する。

「乾杯！」

元貴族兼ガンダールブ兼平民。サイトと元貴族兼元盗賊。マチルダ・オブ・サウスゴータという数奇な二人が初めて同じ願いを言葉にのせた瞬間だった・・・

後にこの“世界”で語り草となる出来事

最強の剣士の軌跡の一つであったことだけは間違いなかった。

フーケと一つの誓いを交わしたサイトは塔に戻りもう一人のお姫様の部屋に寄った。

そう、オルレアン公シャルルが忘れ形見シャルロット・エレヌ・オルレアンともう一度話をするためだ。

今度はノックをせずに無礼にも王族の部屋にサイトは入った。

もともと、部屋の主はそのことを気にも留めずただただ本に視線を落とすのみだった。

「よお、タバサ。話があるんだけど・・・いいか？」
話、という単語に過敏な反応を見せたタバサはガリアきつての騎士らしくすぐさま本を閉じ、『ディテイクトマジック』を掛けサイトの方向に向き直る。

「なに？」
心なしか緊張した雰囲気伝わってくる。

「いや、別に大したことじゃないんだけどな・・・」
前置きをしてサイトは話す。

タバサはタバサで大したことないと言われつつも一言も聞き漏らすまいと気を張り詰める。

そんな、タバサに苦笑しつつ声をかける。

「いや、もうちょっとリラックスして、な？」

『リラックス』という聞きなれない言葉にタバサは首をかしげる。

そんな、タバサを見て意味を教える。

「“リラックス”ってのはだな、なんて言うかゆったり、まったりとだな」

参った。

うまく説明できないぞ！？

もっと、勉強しとけばよかった！

と、訳の分からん後悔をしていた。

一方、タバサは

「緊張するな、という意味に相当する？」

的確に且つ砕いた言い方を見事、その聡明な頭脳で弾き出したのだ

った。

「そうそう。それそれ。そんな感じ……って俺に何を言おうとしたんだっけ？」

そう言ったサイトにタバサはわずかに笑みを漏らす。

それは、ほんの小さな。まさに微笑と言うにふさわしいものだった。

「あつ、今笑ったか？笑ったな？」

「……笑ってない。早く要件を言って」

サイトの追跡に思わず焦る。

「そうか？まあ、いいや。えーと……そうだ！」

サイトはようやく自分が来た理由、訳を説明し始めた。

今から、起こることの詳細だとかいざとなったら自分に従ってくれだとかキュルケの頼みを聞いてほしいだとか

そう言ったことを話した。

話し終わった後は少々の雑談をした。

珍しくタバサの好奇心が刺激される話題だったのでその日はサイトが帰るまで一度も本を開かなかった。

小一時間くらいたっただろうか？

もう、ルイズの部屋へと戻らなければならぬ時間だった。

「じゃあな。これから頼む」

「……出来る限りのことはやってみる」

別れ際の会話としては色気も何もないものであったがいつものタバサにしてみれば饒舌の部類に入るものだったので

サイトは満足して帰って行った。

帰る際、フーケの部屋にタバサを招けば時間の短縮にもなるしもっ

と盛り上がったのでは？
と思った。

(こつと言つとこが『抜けてる』って言われんのかもな)

今までに何回『抜けてる』と言われたことか、と少々落ち込みながらとぼとぼと帰って行った。

次は、アンリエッタ王女がルイズを訪ねてくる。

そう思うと、自然と気が引き締まってくる。

そんな、単純な性格をした剣士は二つの月に見つめられながら主の元へと帰っていくのだった。

自分の帰るべき“場所”へ……

第21章 姫君の依頼偽善の芽生え

部屋に戻ったサイトは出ていった時と同じくぼけ〜っと礼儀正しく椅子に座っているご主人さまの頬をつつつきながら

遊んでいると不意に人の気配がしたので急いで飛びのいた。

少々大きな音がしたはずなのにルイズは微動だにしない。

実際、隣で火事が起きても気づかないんじゃないかと思う・・・

そのルイズがドアを規則正しく叩く音にびくつとして立ち上がった。その後、はっとした顔ではたばたと小気味の好い音を立てながらドアを開けた。

ドアの前には趣味がいいとは思えない漆黒の頭巾とマントに身を包んだ人物が立っていた。

その人物は、懐から杖を取り出し何事かつぶやいた。

「ディテイクトマジック・・・？」

ルイズが黒マントの人物に尋ねる。

こくりと首と縦に振り頭巾に手をかける。

ふわつと頭巾が取られそこにあつた顔は、果たしてこの国の王女アンリエッタであった。

サイトは勿論ルイズも薄々は気づいていた様子なので二人とも大した驚きはなかった。

ルイズの方はあわてて膝をついたが・・・

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」
それは、鬱陶しいしからみから解放されたから・・・なのか懐かし
き友人と再会できたから・・・なのか
とにかく、晴れ晴れとした顔であった。

そんな調子のアンリエッタをかしこまった口調でルイズがたしなめ
る。

しかし、アンリエッタはルイズの発言でますます加速したらしくオ
ーバーに手で顔を覆い悲しむしぐさをした。

「ああ、ルイズ、ルイズ・フランソワーズ！あなたまでそんなこと
を言わないで頂戴」

「姫殿下・・・」

困ったような・・・それでいて、どこか嬉しさを含んだ声で言った。

サイトは再会の喜びを分かち合う二人をずっと見ていた。

そして、その眼には確かな決意は宿っていた。

アンリエッタとルイズはしばらく昔話に興じていた。

この時だけは、確かに王女という硬く太い鎖から解き放たれていた。

そして、アンリエッタは終始ご機嫌であった。

王宮という鳥かごから出された一時とはいえ解放されたのだから当然
然と言える。

昔話に花を咲かせた後アンリエッタは真剣な面持ちになった。

「わたくし、結婚するのよ」

そう言ったアンリエッタの声はどこか震え悲しい響きを持っていた。ルイズもそれを察してかいつもより幾分沈んだ声で返した。

それは哀れみ、同情・・・そして小さな悲しみを含んだ声だった。

「・・・ありがとう。わたくしは、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになりました」

アンリエッタがそう言った瞬間ルイズはギョツとした顔をした。

「ゲルマニアですって！？あ、あの？」

あからさまに険悪な顔をしたルイズが怒鳴った。

サイトも前の世界のルイズを思い出す。

ルイズの生涯の悪友ライバルキュルケの出身地だった事。

それ以上に文化などから一生ルイズはゲルマニアが気に入らなかつたらしい。

大人になっていくにつれそれは幾らか薄らいだのだがよっぽどのことがない限りはゲルマニアなど行きたくもないといった風だった。

ましてや、学生時代の今などカエル以上に不快なものがあることだろう。

「仕方ないのです。今は、同盟の絆を強めることが大事なのですから・・・」

「だからって・・・」

「こればかりは仕方がない事なのだろう。」

「王族である以上・・・きつと・・・
(姫様は・・・知っていたんだわ。こうなることを・・・でも、それって)」

事情を知っているサイト一人が『うん、うん』と頷いていると

「あなた、何してんの？」

今まで、アンリエッタとの会話に夢中だったルイズが怪訝な顔をしてサイトを見ていた。

(こいつ、気づいてたのかよ！って恥ずかしい！サイト、恥ずかしい！)

心の中で悶えつつすぐさま言い繕う

「い、いや。これはだな、俺の国に伝わる『首体操』って言うかだな。その、だ・・・」

必死なサイトだが、ルイズは全く関係ないといわんばかりに

「あなたね！姫様が大変な時に変なことしないでよね！？なあにが『首体操』よ！ふざけないでよね！」

怒鳴ってアンリエッタとの会話に戻っていった。

どうやら、サイトの言い訳はお気に召さなかったらしい。

(まったく、ホントなら俺も本当の事話したいっての)

それができないサイトはただただ胸の内に留めるだけだった・・・

それから、話は進み“あの”話になった。

そう、姫様の極秘任務についての依頼だった。

「あの、礼儀を知らないアルビオンの貴族たちはトリステインとゲルマニアの同盟を快く思っていないかもしれません・・・」

「・・・でしょうね。でも、姫様さえ・・・」

沈んだ表情のルイズはアンリエッタにそれ以上告げることはできな

かった。

「・・・それで今、アルビオン貴族は婚姻の妨げになる材料を血眼になって捜しています」

「そう・・・ですか。でも、そんなものは」

そこで、アンリエッタはとてもつらそうな表情になった。
ルイズも、それに気づいたのか

「あるの、ですか？」

「・・・」

アンリエッタは答えない。

否、答えられないのだろう。まして、自分の友人には・・・

「あるのですね！？・・・して、そのような物とは・・・」

「お、おい。ルイズ、いくらなんでも」

サイトが分かかっていて止めようとした瞬間

「おお、始祖ブリミルよ。この、不幸な姫をお助け下さい！」
何か祈るように手を組み天をあおった。

それに、触発されたのか興奮したルイズが追及する。

「言つて！姫様！この、ヴァリエール家が三女。ルイズ・フランソワーズ！姫様のまつたき理解者であります故！」

「しかし・・・そんな・・・でも」

アンリエッタは未だ躊躇っていた。

(わたくしは、わたくしはなんてことを言おうとしているの？そんな、唯一無二の友人につ！)

「姫様！私に永久に誓った忠誠を今、示させて下さい！どうか、どうか！」

段々と芝居がかってきた二人に半ばあきれかかったサイトは『これはこれで面白いな』などと呑気に傍観していた。だつて、二人を見ていると深夜ドラマよりずっと面白い。

「分かりました。ルイズ、あなたを信頼してお話しいたします」

「あ、ありがとうございます。姫様！」

「実は、以前したためた手紙があるので」

「・・・手紙、ですか？」

ルイズは不思議そうに聞き返した。

そんなルイズに対して頷き、話を続ける。

「そうです。それが、アルビオンの貴族の手に渡ってしまえば・・・トリスティンは！」

ああっ、というふうに再びアンリエッタは手で顔を覆った。

「どのような・・・内容なのですか？その、手紙というのは・・・？」

「・・・それは、言えません。しかし、それがゲルマニア皇室の手に渡ってしまえばトリスティンは一國にて強力なアルビオンに立ち向かわねば

ならないでしょう」

そこで、ようやく顔から手を離したアンリエッタは自分の犯した罪に潰れてしまいそうだった。

当然・・・そう言うには、あまりに無慈悲というものだろう。確かに自分は王族・・・

それも、いずれはトリスティンの民を統治する立場の者だ。

しかし、この思いは止めることなどできはしない。

若い者ならば誰しもが焦がれるこの思いにどうして自分だけは無いと言えようか？

これは、運命だったのだろうか・・・？

何故・・・何故なの？ああっ・・・ウェールズ様！

「姫様！」

ルイズの呼びかけにアンリエッタは、ハッと我に帰る。

(ああ、私は何を考えていたのかしら・・・)

「それで、その手紙は！トリスティンに破滅をもたらすほどの危険な手紙とやらはどこに？」

「それが・・・今はアルビオンに・・・」

ルイズは、思わず息を呑んだ。

嫌な予感とともに不安が襲ってくる。

「まさか、すでに敵の手中に・・・？」

返ってきた答えはルイズの想像した“最悪”とは違っていた。

しかし、その答えもまた酷なものであった・・・

「いえ、敵の手の中にはありません。しかし、このままではいずれ・・・」

そこでアンリエッタは言葉を切ってルイズから眼を逸らす。

「姫様？」

アンリエッタのことが心配にあったルイズはそう言ってみる。そんな、ルイズを見てアンリエッタは一度逸らした目で、もう一度自分の親友を試してみる。

（ルイズ！何故あなたはそれほどまでに優しいの？こんな、偽りの冠を載せたわたくしに・・・）

「わたくしへの気遣いはいいのです」

「そんな、気遣いだなんてっ」

「いえ、話を続けましょう」

ルイズは尚もアンリエッタのことが心配だったが仕方なしに話を聞くことにした。

「それで、その手紙というのはアルビオン王家のウエールズ皇太子が・・・」

「まさか、プリンス・オブ・ウエールズ？」
首肯しそれを認めた。

「では、姫様。私に頼みたいというのは・・・」

「ああ、ルイズ、駄目よ。わたくしっいたら貴族と王党派の激しい対立が繰り広げられているアルビオンに・・・そんな危険なこと頼めるはず」

そんなアンリエッタの様子にルイズは一層、激情にかられた。

「何をおっしゃいます。このルイズ・フランソワーズ！姫様の命とあらば死地へ赴く覚悟すらできております故」

尚もためらうアンリエッタを見てさらにルイズは畳み掛けた。

それはサイトにとっては一番言っただけほしくないものだった

「『土くれ』のフーケを捕らえたこの私めに、ぜひその任を任せて下さいませよう！」

(うわあああ！！！しまった！)

ルイズにとっては『きつと、姫様ってば私の実力を知らないのよ』と自分のすごさを知らせるために言ったのだが・・・何しろルイズは知らなかった。

言えば、フーケは衛兵にとらえられる。

要するに矛盾が生じてしまうことになるのだ。

ゆえに

「『土くれ』の？・・・ですか？」

当然、アンリエッタは不思議そうな顔をする

「はい！あの悪名高い盗賊『土くれ』のフ

ケ、と言おうとした瞬間、むぎゅとルイズの口はサイトにふさがれた。

「うむ？んむ、ぬんんんんん！！！！」

「ひ、姫様！話をつづけて！」

尚も抵抗するルイズの口を必死に抑えつけながらサイトはあわてて促す。

「んんんんんん！！」

ルイズの足が見事にサイトの切ないところへヒットした。

瞬間、サイトは負傷箇所を抑えうずくまった。

こればかりは鍛えられるところではないため仕方がないと言えた。しかも、ルイズの言動に気を取られ自分の身体に全く気を配ってはいなかったのだ。

「~~~~~!!」

今度はサイトが声にならない声を上げる番だった。

「つたく、この使い魔ってばご主人さまに突然何するんだか!」

「あの、大丈夫ですか?」

「姫様、こいつのことなんて放っておいて早く話の続きを」

ルイズの剣幕に圧されたアンリエッタは改めて親友に頼んだ。

「このわたくしの力になってくれるというの? ルイズ・フランソワ
ーズ?」

「もちろんです!」

改めて忠誠と友情を確かめ合っている二人を下から見上げながらサイトは『バレなくてよかったア!』

と安堵していた。

負傷をしてしまったが・・・結果オーライというやつ・・・なのだろうか?

ルイズと手を握り合っているアンリエッタは笑顔とは裏腹に別のことを考えていた。

実のところアンリエッタはここ数か月手紙のことが心配で夜もろくに寝れないありさまだった。

このまま、不安に押しつぶされる。

そう思っていたところに今回の行幸の話が入ったのでこれ幸いとはかりにこうして親友の元を訪れた、というのが本当だった。

事実、こうして親友に話しあわよくば手紙を回収してもらおうと・・・

いや、この親友のことだ。きっと、手紙を取り戻しに行こうとしてくれるに違いない。

それを、狙って自分は・・・
最低だわ。時々、自分がひどく醜く思えてしまう。特に今回は

ふと、隣で寝ているルイズの使い魔だという異国の風貌の少年に目がいった。

そうだわ。この少年もわたくしのために危険な地へ赴いてくれるのだもの。

平民といえど何もしないわけにはいかない。

今のわたくしにはこれくらいしかできることがないけれど、と何だか呪詛のようなものを吐いている少年に声をかける。

「頼もしい使い魔さん」

そう声をかけて手を差し伸べる。

サイトは、差しのべられた手を見て苦渋の選択に苛まれる。

どうする？サイト！

前の世界では確かに唇にしてみました・・・今回は

隣で何かしゃべっているルイズの声も聞こえなくなる程サイトは考え込んだ。

口にするか？手にするか？

ふと、姫様の唇を見る。

柔らかそうな唇。まさに純粹無垢と言うにふさわしき天が与えたもつた唇

その見事な唇に視線が吸い込まれてしまった。

(前の世界では確かにやつちやつたし、歴史に忠実に・・・だし)

サイト、イツチャウ？イツチャイマスカ！？サイトサーン？

「むぐ・・・」

サイトは、アンリエッタの唇に自分のそれを重ねていた。そして、力の抜けたアンリエッタを抱きかかえる。

「あ、りゃ？気絶しちった・・・？」

ルイズが目を見開き

「ひひひ、姫殿下に・・・なな何をしてんのよ！いいいいいい犬

！」

問答無用でサイトを蹴っ飛ばした。

「も、申し訳ありません！姫様」

未だ、「う、うーん」と可愛らしく気絶なさっている姫様を前にぐりぐりと頭を踏みつけられる。

しばらくして目を開けたアンリエッタは

「だ、大丈夫です。ちゅ、忠誠には報いるところがなければなりませんから・・・」

そう言った時、ドアから何者かが飛び出しサイトに向かって行った。

「貴様

ッ姫殿下に

何たる

無礼を！

！！」

ギ シュであった。

負けじとサイトもギ シュをけり飛ばす。

散々、サイトに痛めつけられたのちむくつと立ち上がり自分もその任務に就かせてもらえるよう懇願した。

最初は平民にいいようにやられるギ シュに困ったような顔をした

アンリエッタだったがギ シュが正統貴族の血を受け継いでいると知るとそれを受諾した。

それを聞いたギ シュの浮かれようといったら天にも昇るようだった。

いや、正直頭はすでに天に召されかけていたが・・・

そんな、者たちを尻目にルイズの羽ペンと羊皮紙を借りさらさらと何かを書いた。

そうして、出来上がった封筒をルイズに渡したアンリエッタの顔はほんのり赤く、そして何かに思い焦がれていた

その封筒とともにアンリエッタは自分の手から指輪を抜きルイズに渡した。

それは『水のルビー』と言われるものだった。

ルイズは大事そうに懐にしまい深々と頭を垂れた。

「では、わたくしは部屋へと戻ります」

ギ シュはもうとっくに帰りルイズもウトウトとし始めたころだった。

あれからずっと話をしっぱなしだったのだ無理もない。

ルイズは

「私はもう寝てるわ。あんたは姫様を無事送り届けなさい」

そう言っつて早々と着替えベッドにもぐろうとしていた。
あの様子なら数分で熟睡するだろうとサイトは確信した。
伊達にルイズと暮らしていたのでは無い。

アンリエッタとともに冷たい廊下に出るところ告げた。

「姫様、ちょっと来てほしいところがあるので・・・」

まだまだ夜が深まっていることを、未だ空高くにある双月が示していた。

夜空を支配する双月が今夜はなぜか・・・少しだけ、微笑んでいるかのように美しく輝いていた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4775g/>

ゼロからの再出発

2010年10月11日18時59分発行